
冒険者かく語りき

玉藻&土鍋ご飯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険者かく語りき

【Nコード】

N4182Y

【作者名】

玉藻& a m p ·土鍋ご飯

【あらすじ】

今日もマイペースに進む角あり天然ノーム娘二人パーティ。二人の明日はどっちだ！

ウィザードリオンラインをプレイしていて実際に起こった事を膨らませて小説にしています。

PK怖い。助けてPKK。

原作としているウィザードリオンラインをプレイしていなくても楽しめる様に出来る限り固有名詞は入れず語らず、描写も心がけております。

リアルリリアさんが何と外伝を書いて下さいました！！リリアとミユーの出会いやリリアの過去が語られている力作です。よかったらこちらもどつぞ〜

<http://ncode.syosetu.com/n4816>
y/

さらにリリアも連載へ！

<http://ncode.syosetu.com/n7361>
y/

さらに相方まで書き始めた！！

<http://ncode.syosetu.com/n8943>
y/

この「冒険者かく語りき」に問題あれば即削除致します。

2011/11/11 短編でアップしていたものをまとめました。

今後はこちらに順次連載していく予定です。

内容は全く同じです。感想等も書いて頂いているので削除はしない予定です。

順次pixivさんにも投稿しています。ページを変えたり出来るのでちょっと気分が変わります。

いと恐ろしき『人狩り』（前書き）

プレイしていて実際にあったことを物語風にしてみました。
ゲームなのに本当に恐怖を感じたのは久しぶりです。

PC前で叫びました。

いと恐ろしき『人狩り』

狭い通路が多い遺跡ダンジョン…

畏も多数仕掛けられており、初心者命を屠る事でも有名で、冒険を始めたばかりの冒険者は立ち入る許可も出されないその場所に、今日もまた一つのパーティーが足を踏み入れていた。

「リリア早くー」

「ミューさん待って下さいよー」

ノームの戦士ミューと僧侶リリアの女性二人のパーティだ。装備も整い初心者保護も解かれ、駆け出しながらも徐々に力をつけ、この遺跡ダンジョンもほぼ制覇した二人である。

新たなダンジョンへの立ち入りを許可されてはいるものの、まだ力不足の感が否めない二人は自分達の鍛練と日銭を稼ぐ為に、ここ数日気ままにギルドの依頼をこなしているのである。

今日も二人でコボルト退治をし、陽も暮れかける頃にノルマを達成したのであった。

「疲れたねー。早く街に帰る？」

「はいー。でもやっぱりミューさん強いですよ。強さの秘訣は守りを捨てた所ですか？」

「リリアが魔法で回復してくれるしね。安心して攻撃出来るってのもあるかな」

戦士並に装備が可能とはいえ、聖職者である僧侶は刃物は装備出来

ず重い鎧も装備は出来ない。あくまで打撃武器に頼る事となる。その為に戦士…しかも守りを考えず攻撃に特化した槍使いのミューの強さは非常にありがたいものであった。

後から段差を登るリリアに手を貸しながら、二人で帰路に着く。街に帰るまでは、いくら慣れた道とはいえ油断は出来ない。

「あ痛っ！」

「だーかーらー、リリアはなんで必ず罠にひっかかるかな。そこは道の端を通れば避けられるって行きでも教えたじゃん」

「だって。モンスターの攻撃があるかもって周り見ながらだと、そこまで気を配ってられないですし…」

「うちらだけじゃなくて、シーフもいたらいいんだけどね…。中々いい人も見付からないしねー」

盗賊…シーフの職業であれば、宝箱の罠を解除したり、モンスターの隙をついたりと中々トリッキーな動きをしてパーティーを多いに助けてくれる。

ただ、単独で冒険するには辛く、街でも見掛ける事は少ない。見掛けたとしても既に他のパーティーや、冒険者同士の集まり（ユニオン）に登録していて参加を募る事は中々難しい状態である。

「魔法使いもいたらいいんですけどね」

「行きに見掛けた人を思い出したの？私がああいう人だったら嫌よ。何か…凄い嫌いな気配したし」

今朝遺跡に入る際に、二人は入口で魔法使いとすれ違っていた。単独では魔法使いも冒険は難しく、それほどお目にかかる事はない。

しかもフードを顔も見えない程に目深に被り魔法使いのシンボルでもある魔法の杖を背中に背負い、挨拶も返さず足早に遺跡の奥に向かって行った姿にミューはあまりいい印象を持っていなかった。

遺跡に探索やギルドの依頼で向かう冒険者も数多いのだが、今日はほとんどすれ違う事もなく、二人共にこの魔法使いは強く印象に残っていたのだ。

「回復魔法はまだ使える？大丈夫？」

「さつき簡易キャンプで回復したから大丈夫ですよ。ちょっと傷治したら行くから先に行ってて下さい」

「分かったわ。早くしてよねー」

「はい」

罾が設置してある狭い回廊を抜けた先のL字型の通路を曲がり、食虫植物が群生する広間に入る。

歩き廻る食虫植物は最早モンスターと同じく冒険者を攻撃する邪魔物であるが、この広間の食虫植物達は近くの虫でも食べているのか、特に襲いかかってくる事はなく、一種の安全地帯となっている。

「あんまり長居はしたくないけどね…ってあれ？」

一人先に広間にたどり着いたミューは、そこに他の冒険者のパーティーがたむろしているのを見付けた。何やら深刻そうな顔付きの面々を見て声をかけた。

「こんにちはー、どうしたんですか？」

「ああ…こんにちは。ここいらで『人狩り』が出たらしくてな…警戒してたんだ。」

「人狩りですか…！」

背中に巨大な戦闘用の斧を背負ったドワーフの戦士が苦い顔をしながら答えてくれる。

冒険者にとって忌むべきもの…『人狩り』。

モンスターを狙うのではなく、冒険者をターゲットにし、その財産…そして命を狙う冒険者の事だ。

本来モンスターに奮われるべきその力が同じ冒険者に向けられてしまえば、それは非常に強力な武器となってしまう。ギルドでも当然他の冒険者に対する攻撃行為を禁止しており、間違つて攻撃が当たつた程度ならともかく、もしも人を殺めてしまった場合は、街に帰れば衛兵に捕まり牢へと連れて行かれる。投獄された者は非常に長い時間の苦役が待っているという。

街と違い、ダンジョンの中では衛兵もおらず冒険者同士で自衛するのが基本である。単独で冒険するよりはミュー達や、このパーティの様に複数で行動し『人狩り』に狙われる隙を見せないという事も必要になってくる。げに恐ろしきは怪物よりも理性ある人であるというのが古来からの哀しい事実である。

「この遺跡では見掛ける事は稀だったし、それ程の脅威もなかったんだが…」

「そうなんですか…。しっかしリア遅いな。ちよつと連れが遅れてるので見てきますね」

「お嬢さんお気を付け下さいね。もしかしたらすぐ近くにまで『人狩り』が来ているかもしれませんか」

「大丈夫ですって。ついさっきもそこ通つたばかりですし。心づか

「ありがとうございます」

魔法使いらしき背の高い綺麗な顔立ちのエルフの男に優しく声をかけられるが今はリリアが気がかりだ。

傷を少し治す程度であれば、呪文の詠唱の時間を入れてもさほどかかるものではない。ただ、リリアは非常にそそっかしい所がある為、迷宮の壁に引つかかってしまったり急にその場で一回転したりと、またワケの分からない事をして時間がかかっているのかもしれないと、ミューがL字型の通路を戻って見た光景は予想外のものではなかった。

うつ伏せに地面に倒れ伏し動かないリリア。そしてその横にひざまずき、リリアの荷物を漁っているフードの姿。

今朝方入口ですれ違ったであろうそのフードの魔法使いは、浴びた返り血が蒸発し周囲に赤く漂い、殺気に満ちた目は興奮で赤く光り異様な気配を放っている。

「リリアっ！」

件の『人狩り』だと気付いたミューが剣を抜き、飛び掛かる。

ローブの魔法使いは落ち着いて立ち上がると杖を振りかざし何か口の中で呟いた。杖の先から赤い光の塊が飛び出しミューに直撃する。仲間がやられた事で頭に血が上がり、冷静な判断が出来なかったミューにそれを避ける事は出来ず、まともに食らってしまう。それは火の魔法。自然には存在しない凝縮した火力に鎧の表面が焼け焦げる。モンスターの荒い攻撃とはこれはあまりにもレベルが違う。ダメージを受けた事で冷静になったミューは踏み止まると広間へ身を翻す。仲間の死体を回収し、安全に街まで運んで寺院で生き返らせてあげたい。また、今日の戦利品を盗られてしまうは非常に悔しいし、仇も取りたい、しかしこのままでは自分もリリアの二の舞になってし

まっ…。そう判断したのだった。勿論感情的には到底納得は出来てはいない。

先ほどの広間に走って飛び込むと、物音と蒼白になったミューの顔で起こった事を理解したのか、先程の三人組の内の一の人の小柄なポークルが剣を抜いて入れ替わる様に通路の方へ走って行ったが、直ぐに戻って来るとそのまま遺跡の入口へ向かい走り始めた。

「駄目だ！おいらの技も全く歯が立たない。逃げるが勝ちだぜ」

「お嬢さんも逃げて下さい。うちのシーフの判断は外れません」

「でもっ！リリアが…」

「諦めるんだ嬢ちゃん。レベルの違いを見ただろう」

そう言って足早に入口に去って行く三人。

そして、革靴のコツン…コツン…という音が 逡巡してたミューの耳に聞こえてくる。

「ひっ！」

思わず息を飲み立ち竦む。

先程の魔法使いが禍禍しく赤いオーラを身に纏い、広間に入ってきた。ミューに向けてゆっくりと杖を振り上げる。

咄嗟に広間の奥に飛び込み地面に倒れ伏したミューの背中を火炎の残滓が舐めていく。

恐る恐る密集していた食虫植物の間から顔を上げたミューは今度こそはつきりと悟った。

ギルドの依頼でよく頼まれる害虫駆除に指定されている人間の全長程もあるう巨大な蛾。戦い慣れてきたミューとリリアの二人でも数回攻撃を加えなければ絶命させることは出来なかったその巨大な虫

は、今の炎を浴びて一瞬で絶命していた。しかも数匹まとめて。これほど強力な魔法はミューもまだお目にかかった事はない。そして、今の自分ではどんなに頑張っても勝ち目はない。

「リリア…ごめん…」

ミューはそう呟くと、冒険者に支給されている脱出装置を作動させた。街への緊急転送装置である。

これは一日に約一回しか使用出来ず、本当に緊急用である為出来る限り使わないようにしていたのが功を奏した。

転送される直前にミューが思わず流した涙が地面に残るも、火炎の魔法の熱によって瞬く間に消えて行く。

涙で濡れた地面が跡形もなく乾いていく様は、未熟な冒険者が入れ替わり立ち替わり来ては消えて行くダンジョンの掟そのものであるかの様であった。

いと恐ろしき『人狩り』（後書き）

登場人物の名前は変えてあります。

別パーティがいたのや、戻ったら仲間が殺されていたのとかその辺りはほぼそのままです。

後で無事に蘇生したパーティの仲間と街で合流して二人で怯えておりました。

でもこの臨場感はちょっと病みつきです。

初めは日記でも書くつもりが、結構頭の中で誇張されたのでそのまま小説にしてみました。

求道者イナナ（前書き）

前回投稿したものが結構好評だったので思わず書いてしまいました。
サブキャラのエルフのメイジの話です。
今回も実体験を元にしています。

求道者イナンナ

「生憎とそんな風体の男はゴマンといるからねえ。見たかも知れないけどいちいち覚えちゃいないよ」

「そうですか…。ありがとうございます」

「お嬢さん、随分探してるみたいだけど、あんたのいい人かい？」

「いいえ…ただ…」

「ただ…？」

「私の心の師とっております」

今日も宿屋で、酒場で、あの人の事を訪ねても何も分からなかった。そう呟き溜息をついたイナンナは冒険者ギルドの横の酒場から階段を降りようとして、ふと噴水広場へ目をやった。そこで露店を開こうとしているドワーフに目を奪われる。

「違う…。あの人ではない…」

背中に巨大な戦斧を背負い、売り物として装備品や火打石等を鞆から出していたドワーフの戦士はイナンナの探している人に似ているものの、やはり違う人物であった。

探し続けてどの位の期間になるのか。腰近くまである自らの長い髪が風に優しく遊ばれるのを見詰めながら、イナンナはあの人を想った。

求道者イナンナ。

そう呼ばれ、周りから孤高の存在として見られていた彼女は孤独な存在だった。

エルフとして生まれ持った美貌だけでなく、知性に彩られた瞳は見る者を魅了し、そして動く度に揺れる長い銀色の髪は光の煌めきの様であると、冒険者仲間からも遠巻きに見られていた。
そう…遠巻きに。

エルフの冒険者自体はこの街では珍しいものでもなく、冒険者見習いを教育しているのもエルフの戦士であったりする。

別にエルフだから知性に溢れ、他者を排除する孤高の存在…と言う訳でもなく、他の冒険者と同じ様に笑い傷つき、そして日々を暮らしている者がほとんどだった。

だがイナンナは別だった。

元より魔法の才に溢れ、そして飽くなき探求心で知性を磨き、同じエルフの中でも非常に聡明な部類にいた彼女は同時に孤独であった。誰かに陰で何かを言われても忸える事もなかった彼女だったが、友と呼べる人もおらず、心の内を語れる親しい仲間も恋人もいなかった。

落ち着いた物腰と話し方で見た目よりも年嵩に見られる事の多かったイナンナは、それを活かし早々に故郷を旅立った。

元より近しい縁者もおらず、息苦しいだけだった故郷に未練はなかった。

何かを追い求めるように冒険者となった彼女だが、冒険者となりギルドに登録してもその孤独は癒えなかった。

冒険者としての経験はなくとも強力な魔法をある程度使え、見た目も麗しい彼女に人気は集中したが、皆遠巻きに見ているだけで彼女に声を掛けてくる者はなく、また彼女自身も孤独に慣れ過ぎていた為に、自分から声を掛けるといふことは出来なかった。

そうして周りがパーティを組み、少しずつ経験を積んでいく中で、イナンナは単独で下水道の探索を終えようとしていた。

迂闊だった…。

ギルドからの依頼により、魔法で結界に閉じ込めた盗賊の首領を倒す様言われて来たのだが、下水道のダンジョンの奥まで進んでも肝心の結界は封印されたままであり、そこにあった張り紙によると、封印を解除したければ螺子を集めてこいとの事。

ここに至るまでに、虫の大群を倒したり、生ける屍を燃やしたり、さらにはガス状の毒を吐く生物を倒したりしたが、螺子の様なものが落ちている気配はなかった。何か見落としはないものかと先程倒したコボルトより入手した地図と入口で拾った地図を突き合わせて思案に耽る。

と…そこではたと思い当たった。

このダンジョンの名前にもなっている『下水道』。その『下水道』部分にまだ侵入していなかった事に。

確かガス状の生き物がいた付近の下側にも道が続いていた様に記憶している。そこが侵入すべき場所ではないのかと気付いたイナン

ナは腰のポーチに地図を仕舞い、杖を構えながら歩き始めた。少し道を戻った所のコボルトの住処で、巨大な斧を構え息も荒く立ち尽くす男を見てイナンナは足を止めた。

自分よりも背丈は小柄ながらも筋肉で詰まったドワーフの戦士の身体はイナンナを驚かすのに十分な迫力を放っていた。

そればかりでなく、返り血を浴びて赤く染まった身体に、足元に横たわる他の冒険者の身体。

「噂の『人狩り』……」

思わず声に出して呟いてしまったイナンナの声を聞き付けたドワーフの戦士は、殺気が籠った赤く血走った目をイナンナに向け、杖を抜いたその姿を認めると、いつでも攻撃が出来る様に斧を振りかぶった。

他の冒険者を攻撃する『人狩り』に対して、一般の冒険者が攻撃を加え、あまつさえ命を殺めてしまっても罪には問われない。

目には目を歯には歯を、というものである。

横たわった冒険者の身体を中心に円を描く様にゆっくりと動く二人目線を外せば次は私の番になるだろうとイナンナは必至に力を込めて相手を見詰めながら杖を握る力も緩めない。この状態で呪文を詠唱する隙等ない。散々天才だのなんだの言われた所で、ダンジョンの中では経験の浅い一介の未熟な冒険者でしかないのだ。

と、そんな事を考え、相手のドワーフから目を離さないようにしていたイナンナは、そこがコボルトの住処であり、大量に物が散乱しているのを完全に失念していた。

「キヤッ！」

意外に可愛らしい声を上げて、イナンナは派手に転ぶ。
そして顔から地面に突っ込み、散乱した骨やら布の様なものに頭が
挟まってしまった。

傍から見れば尻を突き出した状態で地面にいきなり突き刺さった形
である。

本人としては異臭と、異性に尻を突き出した様な格好をしている事
で恥ずかしさと臭いとで頭がいつぱいである。
さっきまで対峙していた事も忘れて、必死に声を上げる。

「その人！申し訳ございませんが助けては下さいますか！」

「本当に危ない所をありがとうございます…」

顔を真っ赤にして消え入るような声で謝るイナンナに、唸り声の様
なしわがれ声で話すドワーフの戦士。

「こんな別嬪の尻もさわれたし、俺としては万歳ものだがな」

思わず膨れっ面になり、何か言おうとしたイナンナに指を突きつけ
話を遮る。

「だがな嬢ちゃん、忘れちゃいけないぜ。ここはダンジョンだ。初
心者だからって甘く見てくれるやつもいなければ、誰かが助けてく

れるかどうかも分からねえ所だ。自分で自分の身を守れないなら、経験をもっと積んで余裕が出てからでなきゃこんな奥まで来るんじゃないぜ。それと俺は札付きだ。関わらない方がいい」

コクコクと素直に頷きつつもイナンナは言葉を返す。

「でも、わたくしはここまで一人でやってこれましたし、これからも大丈夫ですわ」

「そういう甘い考えをしてるから初心者だって言うんだ。まだ死んだ経験もないだろう？すぐ傍のあの像に火も灯してない」

「でも…」

「でもじゃない。俺があんたを殺したら、誰かがこんな奥までやってきてお前さんの死体を回収してくれるか、入口まで魂が戻るか…ひどい時は死体をもっと奥まで運ばれてお仕舞めえよ」

さすがに無言になるイナンナ。

「でも…」

「だから…でもじゃねえって…」

「あなたは悪人には見えませんわ」

視線を外さないイナンナにドワーフの戦士は暫し呆気に取られた後、フツ視線を落とした。

「どうだかな…。俺の気が変わってお前さんを襲う前にさっさと消えな」

その言葉に立ち上がりながらイナンナは声をかける。

「イナンナです。お前さんでもお嬢ちゃんでもありませんから」

「鼻つばしらの強えこつて、俺はフェリングだ」

視線を逸らしながらポリポリと鼻の頭をかくこの男が、イナンナの目にはただ闇雲に人を襲う『人狩り』には到底見えなかった。

「ここですね…」

フェリングと別れ、炎が噴き出る罨を潜り抜け、地図でもまだ到達していなかった場所を発見する。

予想通り、下水道と思われる水路が目の前に続いている。正直非常に進みたくはないが、これも冒険者の務めと水に足を踏み込む。

予想以上の冷たさと、そして透明度のまるでない水のぬめりに怖気を奮いながらも、極力その事を考えないように足を機械的に進める。地図によると、この下水道の部分はそこそこの広さがあるようで、探索も骨が折れそうであった。

「はあ…。人形を探したり、ネックレスを探したり…。冒険者というよりはただの便利屋ですね…」

思わず咳きが漏れる。さすがに大分慣れた下水道のダンジョンとはいえここは未踏の地。疲れもかなり溜まっている様だ。

先程もフェリングに色々と言われたばかりという事もあり、頬を自分で張り気合いを入れるとイナンナは探索を開始した。

罨あり、生ける屍あり、巨大な蛙ありと、気が滅入る様な探索を続け、螺子と思われるものを数本回収した。

確かまだ数が必要だったはずと、探索を進めて行くと宝箱の横にガラクタが積まれている個所を発見する。確かあそこは調べていなか

つたと、宝箱を無視してガラクタを探ると案の定目的の螺子を発見する事が出来た。

下水に入る前に探索した部分でも見付けていた事もあり、これで揃ったと腰を上げかけた所で異様な気配を感じて背中がゾクリとする。その気配を探るべく、腰を屈めたまま辺りを見回すと、L字型の通路の奥から紫色の瘴気を纏った二足歩行の狼がゆっくりと現れる所だった。

「紫色の瘴気を纏ったモンスターには手を出すな」

ギルドで何度も言われた事だ。このダンジョンは基本的に初心者が探索を進めてもある程度までは問題のないモンスターしか現れず、初心者の保護が解かれるまで経験を積むものが多い。だが、この紫色の瘴気を纏ったモンスターは別格であり、何人もの冒険者が見習いのまま命を絶たれている。

見付かったら自分も先達の二の舞である。そう感じたイナンナは震える足をどうにか動かし、見付からぬ様に腰を屈めたまま静かに移動し始めた。

だが…。幾ら水のない部分とはいえ、基本は地下の下水道。そして生ける屍や巨大蛙の巣窟である。

もう少しで角を曲がれると安心した矢先に角からその屍が現れては、声を上げるというのが無理であろう。

思わず悲鳴を上げながらも目の前に蠢く本来死すべきモノを天に返すべく杖を振るい、下水に沈めた所で後ろから唸り声が聞こえてきた。

ハツとなり急いで振り向くと、二足歩行の銀色の毛並みの狼が今しも技を繰り出そうと拳を構えながらこちらに向かって来るところであった。

直ぐに角を曲がり、入ってきた下水の入口に向かおうとするも混乱した頭では慣れていない道で正しい方向も分からず、気付けば現在位置を見失う。狼は撒けたようだが、これではあまりに危険だ。そして走っている中で罨を幾つか作動させてしまい、身体が毒に犯され視界が霞み始める。

回復薬を飲みながら、朦朧とする頭でどうにか下水の入口を見付けたが、もうそこで限界だった。

ポーチに満載なのは、モンスターから奪った戦利品。癒しの魔法陣を発生させるキャンプ道具も、慣れた道だからと戦利品の為に捨ててしまった。回復薬も先程のもので底をついた。

一歩ずつどうにか歩を進めるも、身体は自由にならず、ゆっくりと水面が近付いてくる。

ああ…私はこうして孤独に死ぬのだと…回らぬ頭で考える。

神はいなかった。私の進むべき道とは一体何だったのだろうと意識が身体から離れる間際、最後に目に映った光景はバシャバシャと豪快に水を跳ね飛ばしながら突っ込んでくる巨大な足だった…。

イナンナが目を開けると、そこは街の寺院であった。外には噴水の広場があり、見慣れた光景である。

ここで蘇ったとなると、誰かが運んでくれないければ不可能なはず。

「気が付かれましたか」

「私は…」

まだ自分の身体ではない様な違和感の中、イナンナは声を出す。

「先程ドワーフの戦士様がやって来られてあなた様の遺体を置いて行かれたのですよ」

「その方はもしかして…」

「ええ…『人狩り』の犯罪者の方でございました。貴方様の遺体を置くと直ぐに我が寺院の前で衛兵に捕まって仕舞われました」

「捕まった人はどこに行くのですか？」

「スラム街の牢屋に入れられるとのことです。ただ…あそこは非常に治安の良くない場所。行く事はお勧め致しませぬ」

その声を背中に聞きながら既にイナンナはスラム街に向かって走り出していた。

鉄格子の狭い箱に入れられてフェリングは、俺もとうとう年貢の納め時かと頭の上で手を組み横になった。

随分と逃げ回り…そして随分と殺したもんだ…。

周りが囁し立てる様な声で騒がしくなった事に気付いたのは少ししてからだった。いつの間にか意識が飛んでいたらしい。ダンジョンじゃあ気も緩まなかったからなあと独りごちるフェリング。しかしあの鼻つばしらの強い嬢ちゃんには随分と和ませてもらったもんだ、と考えていた矢先にその考えていた人物が目の前に現れた。

「おいおい嬢ちゃん！何だってこんな所に？」

「イナンナです！フェリングさんなんで私を助けたんですか！そのおかげであなたがこうして捕まってしまっただけで…」

「遅かれ早かれ捕まるもんだったのさ。犯罪者の証が消えるまでは随分と時間がかかる。それまでずっと逃げ回れるもんでもないさ」

「でも…」

「でもじゃねえって言ったろ？」

「でも…私があんな無茶をしなかったら…」

「だからモンスターを倒すだけが経験じゃないのさ。そういつた知識も経験の内なんだよ。それが分かったんだし、二人とも生きてるんだからいいだろうが」

「でも…私を助ける理由があなたにはありません」

「目の前に困ってるヤツがいて、それを助けられない程腐ってはないつもりだ。それもこんな別嬪さんなら尚更な」

「フェリングさん…あなた本当は悪い事をしていないんじゃないですか？」

「さあてな…講釈は終わりだ…。よお、イナンナの嬢ちゃん。背中に虫がくっついてるぜ。ちよつと取ってやるからこつち背中向けな」

「え！嘘！取って！取って下さい！早く！！」

「落ち着けて…ホラ取れた」

「どさくさにどこ触ってるんですか！？」

「あ？講釈の代金だよ。6Gと別嬪の尻。まだ払ってくれるならもらうぜ。頂けるもんは頂くからな」

「もう知りません！払いません！」

「そうやってちゃんと感情を表に出せば人も寄ってくるだろうに…。嬢ちゃんもう行きな。幸せにな…」

そう言って犬でも払うかの様にシツシツと手を振ったフェリングはそれ以降一切喋らなかつた。

暫く何か言いたそうにしていたイナンナだったが、衛兵の無言の圧力もあり静々と去っていった。

「ったく…いい女だが…まだまだこれからが楽しみってとこだな」
去っていくイナンナの後姿を見つめながらどこか優し気に、そして寂しそうにフェリングは笑った。

ブリブリと怒りながら宿屋に帰り、いつもの簡易寝台ではなく怒りにまかせてスイートルームに泊ったイナンナは夜半の爆発音に起こされた。まあいいやとそのまま眠りに付き、爆発の真相を知ったのは翌日の瓦版を見た時であった。

【牢屋が爆発！犯罪者多数行方不明！？】

瓦版の周りに群がる冒険者や街の住人によると、昨夜スラム街の牢屋で爆発があり、捕まっていた犯罪者が脱獄したという事だった。慌ててスラム街に向かうも見物人多数な上に、厳戒態勢で近寄れず状況は瓦版以上の事は分からなかった。

「フェリングさん…」

あれから幾度も足を運んだが、フェリングの行方は様として知れなかった。

酒場や宿屋で色々な人に話を聞く内に分かった事がある。

フェリングは元々好んで『人狩り』をしたわけでなく、友の仇を討つために探し続けていた相手が刑期を終えており、それを倒し仇を果たした為に犯罪者になってしまったそう。また、迷宮内でも犯罪者『人狩り』だからと襲いかかる冒険者を返り討ちにしていただけであって、自分から襲う事は一切なかったという。

イナンナは思う。

フェリングに出会わなければ自分は今ここにいないだろうし、もし順調に探索を進めていたとしても必ずどこかで野垂れ死んでしまい、きっと死体も残さず消滅していただろう。

それを何だかんだ言いながら身を持って教えてくれたフェリングにはどれだけ感謝してもきれない。

もうこの街にはいないかもしれない。いても結局憎しみの連鎖で誰かに狙われて、また『人狩り』の仲間だと襲撃されているかもしれない。ただ、自分は今度こそ彼の力になりたいと思う。

あの人の様になりたい、あの人の傍にいたい。これは恋なのだろうか、憧れなのだろうか…。自分でも分からないけれど、ただもう一度会いたいのだ。

また優しい風が吹き抜けた。ドワーフの戦士は露店を開始した。

そうだ、神に祈る聖職者の道もいいがやはり私は孤高の存在でいよう。

あの人にこの想いが風に乗って届きますように。

く風よあの人に届いていますか

求道者イナンナ（後書き）

少し感動を壊しますが、初心者の保護があるうちはPKされず、PKされない、物も盗まれない…というのを本当に失念していたのは作者である私もそうです。

だからイナンナさんが攻撃を食らう事はないはずですが、そこは殺気だったフェリングさんを見て気付かなかった…ということにして下さい。

挿絵：> i 3 5 4 7 4 — 4 4 6 3 <

カボチャ精霊と花火大会（前書き）

何だかんだで読んで頂ける方が多くて嬉しい悲鳴です。本当にありがとうございます。

11月7日、ゲーム内の某所で行われた花火大会の模様の実録が物語の後半に入っております。セリフはほぼ参加者の皆様が実際に話した事があります。作者の妄想ではありません。乱心していません。参加してくれた方々ありがとうございます。

カボチャ精霊と花火大会

「何か…外が騒がしいな…」

眠い目をこすりながらミューは簡易寝台から起き上がる。

昨夜は遅くまで遺跡に潜り、食虫植物を退治したり、幽霊の依頼の為に墓を探したりしていたのだ。

長い時間走り回ったり奥まで行ったりしていたので普段以上に疲れてしまい、昼近くまで寝てしまっていたのだ。

「おはようございます〜」

「もう昼近いよミューちゃん」

「ふあ〜ああああ。そうですよねー」

2階から下り、顔馴染みとなった女将を振り返りもせず挨拶する。

昔は冒険に出てもまともお金を稼ぐ事が出来ず、好意で無料にして頂いた馬小屋に泊めてもらっていたのだが、寝心地は決して良いものではなく体調も万全にはならない為、そこそこに稼げる様に成長してきたからは部屋をグレードアップしたのであった。ゆくゆくは天下のロイヤルスイートの部屋に泊まるのだ…というのがミューの密かな夢である。ちなみにロイヤルスイートの部屋に泊まる金額があれば鎧が一領余裕で買ってしまうのだから、その贅沢さは推して知るべしというものである。

「あ、そーだー女将さん。外が何か騒がしかったけど…ど…わあああああ魔物!」

街中であるにも関わらず、思わず背中に背負った愛槍を抜き放ち構

える。

本来宿屋の愛想のよい女将がいるべき場所には、人の大きさを超える鎌を持った死霊の姿があったからだ。

冒険者が人に危害を加えては犯罪である。冒険者でなくとも勿論ではあるが。街中で自分に魔法をかける為に触媒の魔法の杖や、短剣を抜き放つ者もいるが、抜刀音が聞こえるとやはり身体は構えてしまふ。これを無意識に聞き流す様になるのも、ある種の熟練の証でもある。

気合いの一撃を放とうと、後ろ足に力を込めかけた所でミューを止める声が聞こえた。

「ミューさんダメー！それは女将さんだよー！犯罪者になるよー！」

「へっ…？」

聞き慣れたりリアの声に思わず力を抜くと、全く表情の変化は分からないが安堵したのか宿屋の受付にいる魔物は鎌をゆっくりと下ろすと聞き慣れた女将の声で危なかったと漏らしたのだった。

土下座せんばかりに謝るミューを笑って許してくれた魔物もとい女将さん。どうやらこういったやり取りも毎年恒例らしい。非常に人騒がせである。

毎年恒例ハロウィン祭

街全体がカボチャや魔物に扮した仮装をする。
食事を奢ってくれるというリリアに連れられ酒場に向かいながら説明される。ちなみにリリアも今年初めての祭であるが早起きしたから知っているというだけである。
カボチャ頭の精霊がこの時期に各地に種を蒔く…というのが本来の祭らしいのだが、今年は何故か精霊が種を下界に落としてしまったらしく冒険者にそれを依頼しているそう。ちなみにギルドは一切関与していないとの事。

衛兵まで骸骨の魔物に仮装しており、おっかなびつくりしながらミュー達は酒場へ到着する。

「定食大盛りとケーキのダブルお待ちどうさまです！」

「さあさあミューさん、今日は私の奢りですからジャンジャン食べて下さいね〜」

「ちょっと…！リリア頼み過ぎでしょ！どこにそんなお金あったのよ！大丈夫なの！？」

「ふふー。偵察に行った大蔵で宝箱いっぱい見付けたり、他のパーティと一緒に魔物倒してウハウハなんですよ〜」

よく見れば、装備している鎧や盾も一通りグレードが上がっている。数日別行動している間に随分と稼いだ様子だ。先日『人狩り』に襲われてからかなり気落ちしている様子でほつといて下さいとまで言われたのだったが、まさか修行をしているとは…ミューは元気になるっているリリアに安心しつつも、自分と差がついてしまった事に少しやきもきする胸を抑えながら定食に手を伸ばした。

ここの酒場のドワーフの店主が作る豪快且つ繊細な料理は、冒険者達にも人気である。先日瓦版に紹介された事もあり、今日はいつに

も増して混んでいる。
ダンジョンに潜る際に、やはり空腹では話にならない。しっかり食べ、身体に力をつけて潜るのだ。事前んにしっかりと用意をするのも良い冒険者の務めである。
余談だが、生水ばかりで宿屋にも泊まらずに何日もダンジョンに籠る冒険者もいるが、やはり体調を崩して本来の力が出なかつたり、ふらついた所を突かれ普段よりも大きな怪我をしてしまったりしてしまう。身体が資本である為、管理は大事である。

腹も膨れた二人は街中でも少し高台になっている酒場を出て、噴水広場へ下りていく。

「確かに…なんかカボチャ祭って感じね…」

街全体のそこかしこに南瓜のオブジェが置かれている。噴水も水が吹き出す辺りに目と口をくり抜いた南瓜が置いてある。その噴水の前にカボチャを被った小さな姿が見える。これが件の妖精の様だ。何故か冒険者が妖精からカボチャの様な物を受け取っているのが見える。二人して近付くとカボチャ妖精はこちらに気付いて声をかけた。

「やあ！お姉ちゃん達！イカス帽子が欲しくないかい！」

「わーい！」

「ああ…はい頂きます…」

嬉しそうにカボチャで出来た帽子を受け取るリアと、何か言いたげなミュー。

どういった構造になっているのか、カボチャの下半分を切り抜いた形の帽子は兜の上から被つても落ちる事はなく、また重さをまるで感じなかった。髪の毛の間から突き出している角を阻害する事もなく中々快適である。

「イカスだろう！僕が被っているのに近いデザインなんだぜ！横のおばあちゃんから飴をもらってね！お姉ちゃん達！」

やたらと元気の良いカボチャ妖精のすぐ横に、椅子に座りとんがり帽子を被つた老婆がこちらを見ると、籠つた様な笑い声をあげながら飴を差し出してきた。

「わ〜い」

「ああ…どうもです…」

「種を持ってきたらもつと良いものをあげるからね…」

そついつと独特の笑い声をあげる老婆。

何やら一抹の不安が抜けないミューは気分が上がってこない。

「ミューさんさつきからテンション低いですよ！」

「リリアが高過ぎるのよ…。無料で人から物を貰うのって…何か慣れなくて」

「お祭りだからいいんですよ！」

「うん…そっか、そうだね」

早速ウキウキしながら貰った飴を舐めるリリア。

「わあっ甘〜い！ミューさんこれ美味しいですよ！」

「ついさつき四人前の料理を二人で食べたのによく食べれるわね！。私は取っておくわ」

「甘い物は別腹ですよ！うーん昇天しそうな甘さ…」
「全くもつ…ってリリア？」

飴を舐めていたリリアがそのまま前のめりで地面に倒れ込む。

「へっ？リリア…？リリアっ！！」

リリアは息をしていなかった。

暫くして寺院から復活して戻ってきたリリア。

「いやあ〜酷い目に合いました〜」

「ビックリしたわよー！全く…」

「あ！でも寺院の前で面白い話を聞きましたよー」

魂となつて彷徨っていた時に、寺院の前にいた人（魂？）に何やら話を聞いてきたらしい。それによると、種は一部の魔物…基本的に各ダンジョンの奥に棲息する魔物や、魔物が隠し持った宝箱から入手が可能だという。

「というわけで今日は大蔵行きましょう！」

「えー大丈夫かな…かなり魔物が強いっていうけど…」

「だ・か・ら、私が偵察してきてるから大丈夫ですよー」

酷い目にあつたばかりなのに、いつになく元気なリリアに引きずられる様にして、ミュー達は大蔵へ向かったのだった。

大蔵室

元々はとある商人の宝物庫になる予定だったのが、工事計画が中止している間に盗賊や、はぐれ冒険者等のねぐらになってしまったという哀しい場所である。

「要するに泥棒ばかりなんでしょー。嫌ね」

「まあ近寄らなければ大丈夫じゃないですか？あ！泥棒といえば、最近『ぱんつ泥棒』が出るらしいですよ」

「ええっ…何よそれ！！」

露骨に嫌そうな顔をするミユー。

リリアが話してくれた所によると、女性の冒険者に襲い掛かり、下穿きを脱がせ奪い去り、後日洗濯した上に鍛錬して強化までして送り返してくる…という謎の行動を行う泥棒だという。

「つまり…変態紳士なわけね…」

「洗濯して強化までしてくれるならいいかもです」

「いやいやリリア、あんたさあ…、下何も穿かないで帰るの？」

「あ……。恐ろしい犯行ですね…」

恐怖の面持ちで唾を飲み込む二人。

「とにかく…注意して進みましょう」

「です」

遺跡のダンジョンと違い、下水と同様に非常に見通しが悪い。通路も狭い場所が多く、灯りも人骨から火が上がっていたりと、侵入者

を脅かす仕掛けが多い。

通路から部屋に入る時にも床から炎が吹き上がる箇所もあり、歩くだけで集中力を使う場所をリリアの先導で探索を進めて行く。途中冒険者の為の募金を奨められたり、何故か酒をせびられたりしながら奥へと歩みを進めていった。癒しの魔法の結界を買い忘れたリリアが一度街へ戻った以外は比較的順調な探索であった。

「やっぱり遺跡とは比べものにならないわね…」

「かなり魔物が強くなってますよね」

下水や遺跡と比べても場所柄が非常に強い甲虫に、こちらを麻痺させる程の一撃を放ってくる大柄な戦士、徒党を組んで攻撃してくる野盗までおり非常に辛い探索となってきた。

「なんか…ごめんね」

「ミューさんいきなりどうしたんですか？」

常に勝ち気な彼女らしくなく、しおらしいミューの言葉に、癒しの魔法の結界を用意しながらリリアが問い返す。

「私…傷を負ってばかりでリリアにずっと回復の魔法使わせて疲れさせてるし…今日ずっと先導してもらってるし…なんか…私仕事してないなあって…」

肩を落として下を向いてしまったミューに、リリアは優しい顔で声をかける。

「ミューさんはちゃんと仕事してますよ。私がおとりになって連れてきた魔物もしっかり倒してくれるし、いざという時には私の前に

出て守ってくれるじゃないですか。回復するのが聖職者の務めです。気にしないで下さい」

そういつて笑いかけるとリリアの顔はまさに聖母のようで、ミューの沈んで冷えていた心は温かく溶かされる。

「うん…ありがとう。私頑張る。次の広間しつかりやるね」

「私もあんまり来た事のない奥まで来たし、もう少ししたら帰りましょ？」

「うん！そうだね」

しかし、この後少しがいけなかった…。

「ミューさん魔法使いを先に！」

「わかってる…！」

大広間で魔法使いと、盗賊の中でも戦闘に特化したファイタータイプの集団に囲まれてしまったのだ。

ファイターを攻撃しようとする、脇から火の魔法が飛んでくる。

魔法使いを追おうとすると、ファイターが斧を振りかざし道を塞ぐ。見事な連携で次第に受ける傷が増え、回復も間に合わなくなる二人。

「仕方ない…。リリア！完全に守りを捨てるわ！少しの間堪えて！」

そう言い放ち、大地に足をしっかりと踏み締めると槍を激しく振り回し、辺り一面に砂埃を撒き散らしつつ数体のファイターを巻き込む。さらに、怯んだファイターの横を走り抜け魔法使いに肉薄すると一気に槍で貫く。堪らず地面に倒れ伏す魔法使い。しかし先程か

らの攻撃の影響で限界を超えたのか槍にひびが入る。

「リリア！大丈夫！？」

言いながら壊れて使えない槍を背中に背負い、予備で持ってきていた盾と短剣をポーチから出すと、ファイター達に走り込みながら足を狙って攻撃する。足を抑え動きが鈍るファイター数名。

リリアとファイター達の間に入り込むと盾で斧の攻撃を防ぎながら、確実に一人ずつ打ち倒して行く。

ようやく周りに動くものがいなくなった後も、暫し肩で息をするミュー。

「リリア大丈夫だった？」

振り返ったミューが見たのは、青い顔をして息も絶え絶えになって地面に倒れているリリアの姿だった。

「リリアっ！どうしたの?!回復間に合わなかったの?!」

辛そうな顔で弱々しく首を振るリリア。横を見ると開いている宝箱がある。どうやら戦闘中の喧騒で開いてしまったらしく、毒々しい煙が立ち昇っている。

「毒の罠…。急いで毒消しを！」

しかし、ポーチの中には回復薬と、街でもらった飴位しか入っていない。いつの間にかアイテムも底をつきかけていた様だ。乱戦状態では確認する暇もなく、隙を見ながら回復薬を使い続けていた為だろうか。

「ああ…どうしよう…」

「ミューさん…ごめんね…足引つ張っちゃった…」

「そんな事ないっ！そんな事ないよお…私がおつと頑張れてたら…」

「ミューさんは充分頑張ってますよ…。私を置いて街へ帰って下さい…。また魔物の集団が来たら二人共…」

「そんな事出来るわけないでしょ…！」

「最期に…飴…舐めたいな…」

「……………分かったわ……………」

リアのポーチを探ると何故か飴が沢山出て来た。どうやら一度街に帰った際にまた貰った様だ。適当に一本選ぶと、リアの口に入る。

「ああ…美味しい……………」

「リア……………」

涙を流すミューの前で何故かみるみる顔色が良くなるリア。

「あれ…なんか元気になってきた…」

「嘘…!!…!!…」

思わず絶叫するミュー。へへへと頭をかきながら立ち上がるリアのポーチから、ポロポロと飴が落ちる。状況がよく飲み込めないままミューが落ちた飴を拾い集める。よく見ると飴の棒の部分に紙が細く巻いてあるのが分かった。開いて見てみると…

【身体の状態を治してくれる飴です】

「ばあああああああああ」

ミューが再び絶叫した。

帰り道…。また少しプリプリと怒るミューをリリアが宥める。

「あんな小さい紙じゃ分かんないですよー」

「そうだけど、冒険者足るものもっと注意力を持ってさーってもういいよ。とにかくリリアが無事だったし」

「ミューさん…」

「ほら、いいからこの扉開くの大変なんだから手伝ってよ」

「はい」

縦横に大人の身長の二倍程もあるつかという巨大な扉を力を籠めて開け…開かない。

「ちょっとリリア…それ私と逆に閉める方に力入れてるでしょ…」

「え…嘘？ミューさんが逆なんじゃないですか？」

何度か試すも一向に扉は開かない…。そうこうしている内に反対側から別の冒険者が開け始めた様で扉が動き始めた。二人共手を離す。

「わーい自動だー」

「……………」

人が通れる幅に開いた途端に、扉の反対側にいたエルフの女盗賊が素早く通ろうとする。しかし、リリアも同時に通ろうとした為、二人して開いた扉の隙間でぶつかる。

「あー！すいません」

「こちらこそ…」

再び同時に動く二人。

「あーすみません…」

「いや………」

さらに……。

数回同じ事を繰り返した所でミューがリアの首根っこを掴み扉からどかすと、女盗賊に謝る。

「本当に…すみません…」

「ああ…こちらこそすまない…」

女盗賊も気恥ずかしかったのか、振り返りもせず迷宮の奥へ走っていった。

「りりりア〜」

「え！私が悪いんですかー！」

もういいやと無言で進むミューを後から追い掛けるリア。

何か成長してるんだかしていいんだか分からないリアに、やきもきした心はとっくになくなりミューは可笑しくなって走り始めた。

「ちょっと！ミューさん早いー置いてかないでー。何で笑ってるんですかー」

街に帰り、雑貨屋で見付けたアイテムを鑑定してもらい、さらに不要な物は引き取ってもらおう。

「なんだかガラクタばかりね…」

「まあ盗品とかだから仕方ないんじゃないですかー。あ、ミューさんまた大量に地図売ってる」

「いいでしょ鑑定費用取られないんだから、いい小銭稼ぎになるのよ！」

嬢ちゃん解ってるねと、酒臭い息で買い取り作業を進める店主。酒を飲みながら店をやっているのに鑑定眼が落ちないのが不思議である。

「後は…武器を修理に出して…リリアはどうする？」

「私は露店見てきますー」

「じゃあ後で噴水広場に集合ね」

「あいあいー」

今回の探索で完全にひびが入ってしまった槍の修理費用は普段に比べたら高額だったものの、今日の探索で稼いだお金からすれば充分お釣りの出る金額だった為、ほっと胸を撫で下ろすミュー。

「お嬢さんはいつも小まめに修理に持ってくるのに、珍しく無理したね。強い魔物に襲われたのかい？」

「それもありますけど…。友人が急に成長した気がして焦ってしまっ

つい本音が出てしまう。優しそうなドワーフの鍛冶職人の真っ直ぐ

な目に思わず口から出てしまった様だ。

「でも無事に帰って来れたんならいいじゃないか。何があってもまず帰ってくる。反省したら気持ちを切り替えて探索に出る。引き摺っちゃいけないよ。曇ったりした心は迷いになるんだからね」

「はい…ありがとうございます」

「何だか説教臭かったね…、すまんすまん。っと出来たよ」

まるで新品の様になって帰ってきた愛槍を受け取りながら、ミューは思う。

そう、何であれまず帰ってくる。今回はもう少し…もう少しという、疾る気持ちが無理をさせてしまった。そこにきつとリリアに追いつ行かれそうかもしれないという気持ちもあつたはず。欲・焦り。慣れない場所でそれは命取りになる。今回は助かつたが次はないかもしれない。武器は傷つけるだけでなく、守る為にも使えるのだから。一人で駄目なら二人で。本当はもっといた方がいいかもしれないけれど、まず自分とリリアの二人を守る様になろう。そう槍に誓うのであつた。

新たな気持ちを胸に秘め、少し気を引き締めて噴水広場で向かつたミューが見たのは、とんがり帽子を被り、嬉しそうに光る南瓜の棒を持って花火に火をつけようとしているリリアだつた。

「ちょっと！リリア何それ!？」

「え？種と交換して貰つた箱から出てきましたー。ミューさんの分これね」

そういつてとんがり帽子と、光るカボチャ棒、さらにカボチャ型の

花火と手持ち花火まで渡される。横にいる老婆と同じデザインの帽子のようだ。そしてカボチャ型の箱らしきものが辺りに落ちていく。無言で箱を片付けた後に、ミューも帽子を被る。これは流石に兜を脱がないといけないうタイプのようだ。

「似合いますよー」

「そうかな…？」

少し照れながら立つミューを引つ張ると、リリアは大声で叫んだ。

「今から花火大会やりますよー！余ってる花火を持つてる人は噴水まで集まれー！！」

「え！？花火大会？」

「だってお祭ですよ。はい会場はこっちですよー」

「ま…いつかお祭だもんね。会場はこっちですよー！！みんなで咲かそう南瓜の華ー！！」

「ノリノリですねミューさん」

そうこうする内に声に反応して集まる冒険者達。

「おお会場はここか」

「差し入れをあげよう」

余ったカボチャ花火をくれる人もいる。数名集まった所で早速花火に火をつける。街中で火を使うのもどうかと思いつつも、水がそばにあるから困ったら漬けてしまえばいいやという判断である。

「おおー」

「ファイヤー！」

カボチャの形をした土台から色とりどりの火花が上がり、蝙蝠の形の影まで現れる。非常に凝った作りで周りの冒険者達の目も楽しませる。さらに手持ちの花火を付けると噴水の中をリリアが飛び跳ね始めた。

「火を点ける」

「花火大会だあ」

ミューも一緒になって噴水の中でグルグルと飛び跳ねながら手持ちの花火の火を点ける。パチパチと燃える花火はこちらも非常に彩りが綺麗である。

参加者達も次々に花火に火を点け、噴水の真ん中の土台部分や、さらには水の中にまで設置する。魔法がかかっているのか水の中でも綺麗に火が上がる。

「わーいわーい花火」

「寺院に火を点ける」

「ふぁいやー！！！！」

物騒な事を言っている者もいるようだが実際にやりはしないだろうと高をくくっていたら…。

ドカーーン！！！！

「誰だ 魔法まで使ったのは」

「熱いぞ！！脱げ」

「そうだ脱げ！！！！」

火災の魔法が噴水の中で飛び跳ねていた者達にかかりそうになり慌てて服を脱ぐ参加者達。

「裸祭だ〜〜」
「いえ〜〜〜い!!」

流石にこれは衛兵が駆けて来るだろうと内心冷や冷やしていたミューだったが、衛兵は寺院の方向へ走り込んで行った。犯罪者だ〜捕まえる〜と声が聞こえる。どうやらそちらに忙しく、こっちの騒ぎは放置の様だ。ほっと胸を撫で下ろすミューの横で、ポークルの小柄な男性の魔法使いが再び火炎の魔法を盛大に放つ。

「ふあいやーー燃え上がれ〜〜」
「うわああああ」

何故か服を脱いだ男性の戦士が急に毒に掛かったかと思うと噴水に突っ伏す。噴水の水の中に寝転ぶ者まで現れた。

「人工呼吸しろー」
「危ないぞー」

無茶である…。

ようやく花火も全て消費し、寺院の方では犯罪者がひっ捕えられ衛兵に連れて行かれた。
参加者も方々に帰って行く。

「いやあ遊びました〜」
「だねー」

さてそろそろ服を着ようと、荷物を漁る二人。驚愕の表情で固まるリリア。

「ない……」

「え？何が？」

「私のぱんつがない」

「え？え？」

「私のぱんつがないいいいい！！！！」

「え！？ちよっとリリア？」

慌てて荷物をひっくり返すリリア。

「嘘！祝福されたレギンスだったのに！！」

「え！嘘！本当じゃないの！？」

ざわつく噴水広場。囁きの様に、ぱんつ泥棒か…？ついにこの地域にまで現れたか…、さっき犯罪者が連れて行かれたがまさか…等の声が聞こえてくる。

「誰か…ぱんつ知りませんか？」

「ノームの娘のぱんつを誰か見てませんか？」

ぱんつを連呼するうら若き乙女が二人。聞いてる周りのざわめきも大きくなる。

「いい加減恥ずかしいし、ちよっとリリア、もう一回荷物見てみなよ」

「はい……。あ…ぱんつあった！奥に入ってた」

「もう…あんたって娘は！！すいませんお騒がせしました」

「…！！！！！！本当にすいません！！！！」

頭を下げ続けるミュー。笑って返す周囲の人々。

何だかんだいって今日もこの街は平和である。

こんな事をしていても笑って許すそんな雰囲気もある。結局みんなこの街が、この場所が好きなのだろう。

これからもこの二人も含めて冒険者は沢山現れ、そして去っていくだろう。でも、きつとこの過ごした時間は忘れずに心の中に残るだろう。人と人が触れ合った記憶は早々風化するものではないのだ。

この街に関わる全ての人に幸多からん事を。

カボチャ精霊と花火大会（後書き）

この花火大会は最後大混乱でした。

ちなみに作中で裸と書いていますが、実際は肌着の様な物を着ているので真っ裸ではありません。そこまでエロスはありません。

まるで終わりの様な書き方をしましたが、当分書きます。書かせて下さい。ネタはリアルリアさんが大量に出してくれます。ここでも感謝の言葉を述べたいと思います。ありがとうリアルさん！読んで吹き出すとイイヨ！

このゲームも関わった人もなんかみなさん大好きです。ありがとうございます。ありがとうございます。

仲間と共に・・・(前編)(前書き)

大分日が空いてしまいました。前回敗退した大蔵室リベンジ戦です。

仲間と共に・・・（前編）

「色んな武器を扱えた方がいいよね、やっぱり」

噴水前の広場でミューは腰のバッグから武器やアイテムを整理しながらそう呟いた。

腰に着けているポーチは、幾つか身体の動きを制限しない程度の追加が可能であり、魔物が隠し持っていた物から入手した物や、露店で不用品として売っていた物を買った物、冒険者ギルドからの依頼の報酬等で少しずつ揃えていったのであった。

斧、短剣と盾、両手剣、そして愛用の槍。これら全てを荷物にまとめると大蔵室へとミューは向かったのだった。

「今日のはのんびりかな。リリアとの待ち合わせまで大分時間あるし」

そう言っ入口付近の甲虫を狩り始める。ギルドからの依頼で、ある程度の数を退治してくれば賞金が出る。また、僅かながら自分の鍛錬ともなる。一石二鳥なのだ。

「まずは…短剣かな」

前回の戦闘でも守りながらの戦いに非常に有効であった、短剣と盾を装備する。ちなみに他の武器は両手持ちとなっていていまう為、必然的に盾を装備したければ片手で扱う事の出来る短剣が得物となる。

暫く戦う内に、入口付近の甲虫は比較的退治してしまい少しずつ奥へと進んで行く。通路の突き当たりに差し掛かる頃、横合いから一

人の追剥がミューへ投げナイフを放ってきた。

「あんだ達のテリトリーを犯す気はなかったんだけどね、やられたらやり返すわよ！」

そう言つて、盾で飛んで来たナイフを払いつつ距離を詰め、追剥に連続攻撃を繰り出す。距離を取られてナイフを飛ばしてくれば盾で防ぎ、近付いて足を狙い動きを抑える。あつという間に倒す事が出来た。

「どんなもんよ」

と、気付けば結局ここ大蔵室の二か所ある盗賊のアジトの内一つに足を踏み入れてしまっていた。

「誘いこまれたのかしらね…。私は悪くないわよつと」

アジトの奥から現れる斧を持った姿に身構える。しかし、その近付いてきた姿の持ち主は風体が分かると鎧をキツチリと着込んだ冒険者の二人であった。

「いやあゝ驚かせちまつたみたいで悪かったわ」

「すまん」

自分よりも大柄な人間の男性の戦士2人に謝られて恐縮するミュー。

「いえ…私もついつい入り込んでしまいましたし」

「あんまり畏まらないでくれよ。俺達も熟練つてわけでもないんだから」

「悪いな」

聞けばこの二人も先程パーティを組んだばかりとの事。折角なので二人に混ぜて貰う事にした。

「同じユニオンか何かですか？」

「いや。本当にさっき知り合ったのさ」

「そうだよ」

気さくな方がカイ、何故かほとんど相槌しか打たない方がモルガンと名乗った。三人もいるのだからとアジトの奥を探索を進める。やはりミュー一人の時よりも易々と敵を屠っていく。複数の追剥や戦士タイプの賊が出て、二人が斧で攻撃を加え怯んだところを一体ずつトドメを刺していく。

「やっぱり三人いると早いですね」

「そうだなあ。でも戦士三人だとバランス悪いなあ」

「そうだね」

「ここの大蔵室まだ奥まで探索してないですよー。盗賊とかいたら楽だと思っんですけどね」

合間を見て癒しの結界を展開させ傷を回復しつつ、談笑する三人。やはり僧侶がいて回復をしてくれない分、自分達で様子を見て傷を癒さなければならぬ。戦士三人だと攻撃に特化している分戦闘は短くて済むが、やはり魔法使いや盗賊の職についている者等がフォローしてくれると非常にありがたいのである。

また幾人かの賊を倒し、ミューが先程の賊が落とした短剣を拾おうと腰を屈めた時だった。

突然火の玉が飛んで来たかと思うと、モルガンに直撃した。もんど

りうつて転げるモルガン。

急いで武器を構え、火の玉が飛んで来た方向を見ると、小柄なポークルの男が杖をこちらに向けていた。その赤い殺気立った目と共に……。

「チツ！『人狩り』か……」

「油断してしてたわ」

賊を追い払うのに慣れ、三人の戦闘の流れも出来てきて油断していた所だったから堪らない。モルガンは先の戦闘で消耗していたらしく、火の魔法を食らい既に動かない。そしてミューとカイの二人も傷を負った状態で、そろそろ癒しの結界を展開しようかとしていた矢先だった為余力は少ない。

逃げるかどうかしようか悩んでいるミューの横で、カイが斧を振りかぶってポークルの魔法使いに切り掛かる。

しかし、人狩りをする程の覚悟のある冒険者の炎は、斧の一撃が届く前にカイをもその餌食にしてしまったのだった。

目の前で立て続けに散らされる命を見て、ミューは迷わず逃げる事を選んだ。アジトの入口側に人狩りがいる為、やむなくアジトの奥にである。どうやら逃げる者には興味はないのか、得物が二つも手に入った為か、人狩りは追ってくる事はなかった。

先程の場所から離れ、少し狭まり部屋と部屋を繋ぐ回廊の様になった場所で一息つくともミューは手持ち最後の回復薬を飲み終えた。覚悟を決めて慎重に入口へ戻り始めた。のんびりしていれば他の賊にやられる可能性もある。現状のミューの装備と強さでは、賊が複数襲いかかってきた時に一人で対応出来る程強くないのだ。

左右を見渡しながらゆっくりと歩みを進める。どうやら既に人狩りは立ち去ったようだ……と、ほっと胸を撫で下ろし、もう一歩足を

進めた時に、呪文の詠唱の音が背後から聞こえ身体が自由がきかなくなつた。後ろからヒタヒタと近寄る小柄な足音、そして新たな呪文の詠唱。ミューは心の中で絶叫した。

運命を司る気まぐれな神の天秤は、今回も無事にミューの側に傾いてくれた様だ。無事に大蔵室のダンジョンの入口付近にある守護者の像の横で、ミューは蘇ることが出来た。横には既にカイの姿もある。

この世界では、死は絶対的な終わりではない。不幸にも死を迎えてしまった者は、運命を神の天秤に委ね、運が良ければ再び生を得ることが出来、運が悪ければ存在ごと永久に失われ完全なる終わりを迎えてしまう。

「やられちゃったね〜」

「ああ……」

「あれ？モルガンさんは？」

「何でも斧を奪われたらしく、復活してすぐに奥へ走り込んでつたよ」

そういつた矢先に、目の前で青い清浄な光と共に蘇るモルガン。そして直ぐ様アジトの方へ走り込んで行く。

「俺の斧おおおお！！！！！！絶対許さねえぞ！！あの糞ガキぶつ殺してやる！！！！」

「……………」

「……………」

呆気を取られる二人に全く気付くことなく叫びが遠ざかっていく。そして少しすると、また蘇つたモルガンが叫びながら再び奥へと走

って行った。

「ああいう人だったんですか…」

「ああーそういえば悪魔の名を冠した斧を手に入れたとか自慢してたわ」

「それは結構奪われると悲しいですね」

「ミューさんは大丈夫だった？」

「ミューでいいですよ。私は…さっき入手した短剣だけです。これならまあいいかな」

「そか。とりあえずどうしようか？一旦街帰る？」

「そうですね。荷物整理もしたいし」

暫く待ったが、今度はまるで帰ってくる気配のないモルガンを置いて二人は街へ帰還した。

規定数に達していた甲虫退治の依頼を報告し、再度受け直す。こういった依頼は、常に増え続ける魔物がいる限り無くなることはない。何となくそのままパーティーを組んだままだったカイと連れ立って再び大蔵室へ。

今度は人狩りの気配もない様で、中は静かなものだ。鍛錬の為と今度はミューも斧を装備して再びアジトの方向へ進むと、入口でドワーフの戦士が両手剣を使い、易々と敵を切り裂く様が見えた。折角なので声をかけ一緒に奥へと進む。

十字路になった箇所、刃渡りだけでミューの背丈ほどもある長大な斧を持った巨大な体躯の戦士と戦っているエルフの男性が目に入った。どうやら普段のミューと同じ槍使いの戦士の様だ。戦闘が終わった所で声をかけると笑顔で参加を了承してくれた。

癒しの結界を展開し、傷を癒しながら改めて挨拶をする。

「よろしくねー僕シンって言うんだー」
「4649」

見た目よりも随分と若いのか、厳つい髭と体格に似合わず笑ってる様な高い声と語尾で喋るドワーフのシン。もう一人は遠方の出身なのか、いまいち言葉が通じない感じのエルフの男性。不安を覚え確認を込めて再度声をかける。

「この辺りで狩りをするつもりですが大丈夫ですか？」
「YOROSIKU」
「うんいいよー」

何やら不安が増した気がするミューであった。

増した不安とは裏腹に4人のパーティしかも全員戦士というのは非常に攻撃的な組み合わせの為、ほとんど傷を負うこともなく敵を倒していく。

それでも戦闘が続いて蓄積したものや、巨大な戦士の使う叩きつけで身体が動かせない内に防御出来ず食らった手痛い一撃で傷は少しずつ増えていく。癒しの結界を張りつつ、ミューがぼつりと呟く。

「あ」
「どしたん？」
「どーしたのー」
「女の子私だけだ。逆ハーレム」

場が和む。こんな冗談でも笑ってくれる様なパーティだと、戦う時に緊張しなくていい。先遣隊としてこの街に早めに来たものの、気

ままだに探索をしているミューは、熟練冒険者と違い、それほど多くのダンジョンの通行許可はまだ出ていない。同じ先遣隊の冒険者の中には、現在発見されたダンジョンは全て制覇している者もいるらしい。また制覇した者でも毎日ダンジョンに潜り希少品の発掘や自己の研鑽を欠かさないという。非常に素晴らしい事だが、人には人のペースがある。暗く閉ざされたダンジョンの中で、こういった笑いが出せるのんびりとした探索の方が自分には性に合っている。そう笑いながらミューは心の中で思った。

そうこうする内に、また戦いの流れが出来上がっていく。戦士や賊の姿が目に入ると、誰かがオトリとなつて呼び寄せ、別の者が防御の為に身体をしつかりと地面に沈めて待ち構える。また別の者は戦いの雄たけびを上げて周りを鼓舞するのだ。回復役がいない事を除けばこの戦士四人のパーティーでは中々理想の流れと言えよう。

回復薬が足りなくなったメンバーに回復薬を交換したり、合間に談笑したりしつつ戦闘と回復を繰り返していると、地面に倒れ伏した巨大な戦士の影から宝箱が見えた。盗賊の技能を持っている者がいない為、誰が開けても大差はないのだが、ミューが宝箱を開けに行つた。

「ミュー行っきまゝす。みんな離れてね」

宝箱に仕掛けられている可能性のある罠を警戒し、遠巻きにミューを見ている他の面々。しかし、思ったよりも開けるのに時間がかかってしまう。その間に常よりも巡回ルートを早めたのか、巨大な斧を掲げ戦士が到達してしまつた。

「えー何だろ。開かないなあ」

「ミューちゃんは開けるのに専念してて！」

「こつちは僕達に任せて〜」

「YORRO〜」

言葉に甘えて解錠に集中するミュー。しかし、敵はこちらの都合など勿論関係ない。斧でパーティをどんどん押し込んでくる。気付けば宝箱を開けるために作業しているミューのすぐ横で戦闘をしている状態となってしまうっていた。

「畏は…石つぶてかな？お！開いた〜」

激しい轟音と共に宝箱が爆発し、はじけ飛ぶ。敵味方問わず巻き込まれる戦士達。

土煙りが収まると、動く人影は3つ。瀕死ながら辛うじて生きているミュー。ある程度体力が残っていたシン。そして、長大な斧を地面に突き立てて頭を振りながら立ち上がる敵であった。

慌てて足を狙って斧で攻撃を繰り返すミュー。シンも両手剣を力強く振り下ろす。今二人の頭にあるのは殺らなければ自分が殺されるという一点だけである。

どうにかトドメの一撃を与え、ズズンと音を立って地面にその長大な斧を落とす戦士。ほっと息を吐くミューとシン。

「あ・は・は・は…。ゴメンネみんな」

「たまにはあるよー。死体担いで行こうかね」

と、見ているうちに死体が一つ灰になる。神の天秤が悪い方に傾いてしまった様だ。ちなみに灰になってもまだ蘇る可能性はあるが、これに失敗した場合魂が消失し、永遠に消えてしまう事となる。

「嘘!」

「わわわわ〜」

慌てて灰と遺体を回収しようとするも、先程の轟音でアジトから大量の賊が現れ、仕方なくそのままして逃げ出す二人。ダンジョンの入口で癒しの効果のある泉の水を口に含み、喉の渇きと疲れを癒す。

「よし！戻ろう！」

「おう〜」

再びアジトの奥へ進む二人。先程の場所にどうにか辿り着くと遺体は無くなり、灰だけが残っていた。自力で復活が出来た様だ。賊がそこら中に溢れている為、シンが盾となっている間に灰を回収する。

「回収出来た！」

「はい逃げよう〜」

二人して武器をしまつて全力疾走で逃げる。ナイフが飛んでこようと斬りつけられようと全て無視して入口の像へと向かう。像に近付くと灰が荷物から勝手に放れ像が光り出した。どうやら無事に復活出来た様だ。

「ARRI〜」

若干復活させない方がよかつたのではないかと心の中で悪い考えが一瞬よぎってしまったミューであった。

その後街へと帰還しパーティは解散した。夕飯とその後の探索をリアと約束していたからだ。

「今日は本当に組んで下さりありがとうございました。後ごめんなさい」

「OTUKARE」

「大丈夫だよー。またねー」

結局エルフの戦士とは最後まで会話が通じたのか通じてないのかが分からないままであった。微妙な顔をして見送るミューに一人まで残ったカイが声をかける。

「そっぴやさつき話してたけど、知り合いの盗賊来てもらおうか？」

「いいんですか？」

「ああ。俺は大蔵室はあらかた探索終わってるし。後から行くように連絡しとくわ。ダンジョンの入口で待ってて」

「わかりました。ありがとうございます！」

「うんお互い様さ、またね」

出会いもあり、別れもある。一緒にパーティ組んだ相手の縁からこうやって繋がる事もある。本当に様々な冒険者がそれぞれの思惑でもって動いている。同じ場所で探索をしても人が違えば様々な物語が生まれる。

そういう事もあって自分は冒険を辞められないのかもしれないとミューは思いつつ、リリアの待つ酒場へと向かうのであった。

仲間と共に・・・(前編)(後書き)

今回も色々ネタがありました。が幾つか選んで書いています。
ドワーフの戦士はチャットの際ほとんど「www」が語尾に付いて
いました。

エルフの戦士は最初から最後まで本文の通りな感じでした。
実際色々な人がいますね。

仲間と共に・・・（後篇）（前書き）

こちらは何故かギャグパートと化しました。

我がパーティは今日も平和です。そして人の縁というのは本当に大事だなと感じます。

今回書く際にどうしてもごく一部でネタバレに近い物が出て来てしまいました。細かい描写をそこだけぼかしていますが、ご注意ください。大蔵室までクリアしていれば、ああ〜というネタです。

仲間と共に・・・（後篇）

「という感じで色々あったのよ！」

待ち合わせにしていた酒場で頼んだ料理をモグモグと口に入れながら喋るミュー。口元は隠してはある。ちなみに今夜も4人前である。

「そんなんですかー。でも助かりますね。盗賊さんが来てくれると

上品に少しずつ口に運ぶリリア。

「というわけで食べたら最深部まで行くわよ！」

「はい」

大蔵室に入ると、先程カイが派遣してくれていると言っていた盗賊の冒険者はまだ来ていない様だった。ミューはごそごと両手剣を出す。

「そうそれでね、さっき一緒だったドワーフの人の剣捌きがカッコ良くてさあー。思わず装備してみたよん」

「おお！カッコいいですね。でもへっぴり腰」

「仕方がないでしょ！バランス取るの大変なんだから」

そう言いながら剣を振ってみるミュー。中々凶悪な風切り音に怯えるリリア。

「私に当てないで下さいよ」

「分かってる、分かっているって。…あれ？」

ひたすら剣を振り続けるミュー。

「ちょっとミューさん何やってるんですか!？」

「いや…私も分かんない。なんか…身体が勝手に…」

人に当たらないように壁に向かうも、何故か剣を振り続けてしまうミュー。

「たまに呪いがかかった武器があると聞いた事がありますが、こんな悲惨な呪い…」

「ちよつと見てないで止めて〜!」

「気力が無くなるように技をいっぱい使えばいいかもしれません」

「そうなの〜!？」

早速壁に向かつて、薙ぎ払い等をするミュー。非常に危険である。しばらく色々な技を試すと突然剣をしまう事が出来た。

「……………呪いね……………」

「……………呪いですね……………」

「私…両手剣は使わないようにするわ……………」

「それがいい気がします……………」

結局短剣スタイルに戻したミューであった。

「何か疲れた……………」

ダンジョンの中だというのに横になるミュー。リリアも一緒になつて横になる。

「リリア?」

「添い寝」

ちよっとほっこりしたミューだった。

「お二人さん和んできるとこ悪いんだけど行くよん」

気付けばポークルの女性の盗賊が目の前に立っていた。寝ているミューの目線からしても、あまり高さを感じない小柄な身体だ。

「カイから派遣されて来ましたデイジーです。よろろー」

「あ、はいよろしくお願いしますミューです」

「リリアです」

「奥まで探索するんだってね？サクサク行くよー」

「はい」

「お願いしますです」

早速進む一行。前回敗退した大広間に差し掛かる。ゴクリと生唾を飲み込む二人の緊張等全く関係なく、明るい声で素早く進むデイジー。

「行くよー」

「あぁっ！ちよっと待って下さいよ」

「待たないよー」

「元気ですね」

オトリとなる煙を設置し、そこに魔法使いや戦士達が集まった隙に先へ進むか、気が向くと短剣で近付いてきた敵を高速で切り刻んでいる。それ程力があるように見えないのに、あっという間に敵は「なます切り」である。

入口に炎の罫が仕掛けてある部屋に入ろうとした所で、戦士の数名が追い掛けて来る。

「無視しちゃっていいよー」

そうしたかったが、しつこく攻撃されて振り払えずミューは牽制の為に数回切りかかると、一気に部屋の中へ。一人ついてきてしまった盗賊の戦士を仕方ないと呟きながら、あっという間に切り刻むデイジー。かなりの腕である。

「リリアー早く〜〜〜」

「はーいーい」

入口の炎の罫に焼かれながら入って来るのは最早お約束である。

魔法局駐屯地

冒険者ギルドに来ていた依頼によると、この大蔵室の調査を進めようとした所、恐ろしい怪物に襲われ調査団が壊滅しかかったらしい。そして冒険者にその露払いをして欲しいとの事であった。調査を進める為に作ったであろう駐屯地も今では野戦病院の体である。

「冒険者か！今更のこのこと…これだから下賤な者に頼むのは嫌なのだ！」

あまりの言い草に青筋が浮かぶミューとリリア。宥める様に話の続きを促すデイジー。

「…ともかくだ。ギルドに依頼した通り、怪物はこの先に封じてある！さっさと退治するのだ！わかったな！」

完全なる上から目線の言い方にも、一切表情を変えないデイジーに、ミューとリリアの二人も抑える。

そして投げつける様に渡されたのはヒビが入った水晶であった。

駐屯地の奥へと進むと、件の怪物が封印されているだろう装置があった。早速先程の水晶を嵌めこんでみるも反応は無い。

「やっぱりヒビが問題かな」

「ですよね〜」

デイジーは後ろで腕を組んで静観している。用心棒はするが、口出しは基本的にしないスタンスの様だ。

仕方がないので、駐屯地に戻って聞き込みをしてみると、この大蔵室のどこかに研磨する装置があるかもしれないと情報を

得る事が出来た。ただ、元々ここは下水の一部だったせいもあり、危険がないように装置は停止されているかもしれないとの事。早速地図を見て、まだ到達していない場所へ進むことにした。

道を戻りながらミューはデイジーに声をかける。

「何でさっき怒らなかつたんですか？」

「怒って何になる？話が進まないだけじゃん」

「そうですね…あんなに言われて腹が立たないんですか？」

「腹立ててもムダー。貴族様は甘やかされて育ってるし、自分の思う通りにならないから身分の低い冒険者如きに気を配ってられないんですよー」

魔法局の調査団でもある騎士達は、貴族の次男坊等が多いらしく、

正直な所は実戦に際してまともに戦える者も少なかったらしい。そして貴族と冒険者の身分の差ははっきりと別れている。まともに刃向っていたらどうなっていたかと、今更ながらに恐怖を覚えデイジーに恐縮するミューとリリアであった。

「こつちかなー」

少し道を戻り、無数の甲虫が溢れる道を通り抜け巨大な扉を通ると道の途中にハシゴが掛かっているのが見てとれた。これを登れば上部に上がることが出来る様だ。今まで歩いていた場所が本来下水として機能していた時には、頭上まで水が流れている場所だったらしい。

デイジー、リリア、ミューの順でハシゴを登り、少し進むと道が切れている箇所に着いた。

「跳ぶよー」

「え？」

そう言つて助走をつけて反対側に跳んだデイジー。リリアも軽々と反対側に到着する。

ミューも真似して助走をつけようとし、鎧の重量がそもそも自分の持てる重さを超えているのに気付いたのは跳んで距離が足らずに落下してからだつた。

「えーミューちゃん届かないの？」

「ミューさん大丈夫ですか？」

「大丈夫…」

武器をポーチにしまい重量を軽くする。これで跳べるはずだ。再び梯子を登つて助走をつけてジャンプする。

ゴーン

「痛っああああああ」

兜が衝撃を和らげてくれたものの、目の前がチカチカする。跳ぶことばかりに気を取られ上方の確認を怠っていた様だ。石で出来た天井近くの梁にしこたま頭をぶつけてしまった。

さらにもう一回と、上をしっかりと確認し空中に身を投げる。今度は気合いが足りなかった様でしっかりと助走をつける事が出来ず落下する。

「うわああああ」

さらにもう一度。今度は助走している最中に足を滑らせて下へ落下。

「うううううう」

上の台の上では、ポークルって可愛いですよねー、でしょー、デイジーさん抱っこしていいですか〜等と、ほのぼのした声が聞こえてくる。急いで合流しようと思ったミューが無事に対岸に辿り着いたのは10回以上失敗してからだった。

炎の罨に焼かれ、甲虫に追いかけられ気力も尽きかけたミューが見たのはスヤスヤと寝ている二人だった。

「酷過ぎる…」

「ほらー癒しの魔法をかけてあげるから気を持ち直しましょ？」

「うううう」

高台の先を進み、木で出来た階段を降りながらリリアがミューを慰める。ミューは色々とポロポロだった。先導しているデイジーは何故かやたらとジャンプしながら軽やかに進んで行く。

「それ…私が重いつてことですか…」

そつだと言わんばかりに振り向かずにその場で飛び跳ねるデイジー。真似して跳び始めるリリア。

「リリアまで…」

追いかけるミューの目には一筋の涙があった。

「ここだねー」

いかにもな大きい扉を三人で開ける。中には何やら装置が置いてあり、「用なき時はスイッチを切る事」とある。

何故か遠巻きに見ている二人を尻目にスイッチらしきものを入れるミュー。無事に装置は作動を開始する音を発したが、水で濡れていて痺れる様な衝撃があった。

「痛っ。二人共知ってたの〜?」

振り返ると、ミューとデイジーの二人が部屋の外から頑張っつて扉を閉めている所だった。

「え!ちよつとー!ー!」

必死に扉を開こうとする。戦士一人と、僧侶と小人の盗賊では力がちよつと同じ位なのか拮抗する。隙間からクスクス笑う声が漏れ聞こえる。

「ぬおおおー!!」

気合いを入れて一気に体重をかけて扉を開く。息を荒げ、ヨロヨロと出てきたミューへ、スイッチはONになったかと声を掛けるデイズー。

「スイッチはONになりましたが、ミューはOFFになりました…」

そういつて膝小僧を抱いてうずくまるミュー。流星にやり過ぎたとミューの横にリアは座ると手を引っ張る。

「ごめんなさいねミューさん行きましょ？」

「ううう…ダイエットするもん…スイッチ一つでポンドもん…」

ブツブツ言いながら引き摺られていくミューであった。

その後無事に研磨する装置の所に到達し、再び駐屯地に戻ってきた一行。奥の結界の所に水晶を嵌めると無事に起動した。装置は赤い光を放ち、非常に凶悪な印象を醸している。

「用意はいい?いつくよーん」

「よし!戦士本領発揮!!」

「いいですよー」

三人は光に包まれた。

光が止むと、そこは広間の様な空間だった。

リリアが防御の魔法を全員にかけ、ミューが気合い入れの為の声を上げる。

「ムー」

デイジーは素早くオトリ用の罾を仕掛け、そこに集まった生ける屍を屠っていく。毒等を吐きかけられているが全て避けて短剣で切り刻む様は疾風である。

ミューも奥にいる自分の身長二倍程もありそうな巨躯の戦士に狙いを定めると、斧の柄をしっかりと握りしめ思い切り大上段に振り下ろしさらに横薙ぎに払う。力を込めた縦切り、足を狙うを横切りを交互に繰り返し足止めをしつつ確実に相手の体力を削って行く。そこに生ける屍を仕留めたデイジーが加わるとあつという間に戦闘は終了した。

「勝った」

「勝てましたね！三人だと早い」

「まあねラクシヨ」

駐屯地へと戻り、依頼の怪物を退治した旨を報告する。予想通り特に労う言葉もなく調査を開始するとぶっきらぼうな答えが帰って来ただけであった。とにかく依頼は完了であるから、ギルドに報告すれば報酬が手に入るはずだ。

「んじゃお先々何かあったらまたよろろ」

「ありがとうございます！」

「手助け感謝です！」

駐屯地にあった光る転移装置を利用してあつと言う間に街へと帰還するデイジー。

「なんか本当に疾風のような人だったね」

「盗賊つてスゴイですねー。でも楽しかったですよ」

「たまにはいいけどやっぱり自分達の力で戦いたかったな」

「少しずつ力をつけましようよ。私達で…ね？」

「そうだね。さっ今日は一日疲れたし帰って寝ないとね」

「ロイヤルスイーツの部屋ですか？」

「ふふふ。今日は高価なコインも拾ったしそれもいいけどね。いつもの部屋でいいわ」

そうして転移し街へと帰還する二人。転移の間際にカイにもしつかりとお礼を言わなくてはと、心に刻んだミューであった。

仲間と共に・・・（後篇）（後書き）

相当ネタが貯まってしまい、書くのが追い付いていない状態です。実際には、黄龍の神殿までクリアしています。ここも色々あったので長編になるかもしれません。

期間限定イベントも始まったし、またそのネタも書けたらなあと思っ
ています。

ちなみに今回出てきたリリアさんですが、実際には別々に攻略してしまつたのでリアルリリアさんではなかったです。やたらとネタを振ってくれたので置き替えて書きました。デイジーさんはほぼそのまんまです。宝箱テロをやらかしたり、ジャンプに失敗して泣きながら追い付いたのも実際に作者がやりました。

両手剣振り回し続けたのはバグみたいなんです、折角なのでネタにしてしまいました。

南瓜話・余話 酒場の料理人かく語りき（前書き）

最近街中で南瓜帽子を被ってる人が少ないなあと思って夕飯を作っていたら思いついて一気に書いてしまったネタです。今回画像も挿入しています。これも深夜にみるとお腹に毒かもしれませぬ。

南瓜話・余話 酒場の料理人かく語りき

厨房の主マイゾグは悩んでいた。

彼の目の前にあるのは荷馬車の半分はあろうかという、かなりの量の南瓜である。

つい先だつて行われた南瓜祭での集客を見込み、大量に仕入れておいたのだが、一番の客である冒険者達がダンジョンで種を探すのに夢中で思ったよりも酒場に足を運んでくれなかったのである。いくらか少し寒くなつてきて保存がし易いこの季節であろうと、小出しにしているはこれだけの量は傷んでしまう。女性の胴周り程もある逞しい腕を組みながらマイゾグは溜息を漏らした。

この街の食事処も兼ねている酒場は、冒険者のパーティの斡旋から、冒険者ギルドの出張所、さらには盗賊ギルドの人間もいれば荷物の預かりまでであるという、非常に充実した施設となっている。ただ、冒険者ギルドの受付自体も今は噴水広場で王様からの直々の依頼を斡旋している特務職員なる者が行っている為、酒場までは中々来ない上に、盗賊ギルドに用事がある客もたまにしかおらずお店は空いている状態だ。

さてどうしようかと悩みながらカウンターで頼杖をついていたマイゾグの前に、救いの神いや…南瓜の神が降臨した。

「だーかーらー今日は奢るって。珍しいコインも手に入っしたし」

「そうやって食事にお金使うからスイートルームが遠のくんですよー」

そう言いながら入ってきたノームの娘二人の内、一人が被っていた南瓜帽子を見てマイゾグは思わず彼女の手を握り叫んだのだった。

「南瓜の女神！！我を救い給え！」

いきなり大声を出され目をパチクリさせたノームの娘は、しかし話を聞く中でその目を輝かせて快諾してくれた。

「分かりました！そういう事なら手伝います！」

「さすが南瓜農家……」

「南瓜以外も作っていましたあゝ！」

随分と仲の良い二人だと目を細めたマイゾグは、この娘達に宣伝をお願いする事にした。何せ祭が終わっても頭に被る位南瓜が好きなんだろうから……。そう心の中で呟くと、二人を見送ったマイゾグは急ぎ仕込みに入ることにした。

ノームの娘二人は、南瓜帽子を被った方が色々と先導していた様だ。「汝 南瓜 忘れるなかれ」と書いた看板をどこからともなく用意して街を練り歩きつつ、声掛けをしてくれたらしい。こっちですよーという声と共に大量の冒険者がドヤドヤと入ってきた。看板娘のマリーを始め、クールで知られているエリーゼもこの時ばかりは慌てて接客に走り回る。普段はカウンターで受けている注文も、お客に席に座ってもらいこちらから注文を取りに回るスタイルへと急遽変更した。

一体どんな技を使ったのか、二階のバルコニーにまで冒険者が溢れ、椅子がないものは樽にも座る始末である。

「ご注文ですね、ハイ！よろこんで！ダイヤモンド南瓜定食入りまし

た！！」

「骨付き肉大盛りと、南瓜サラダ盛り合わせ注文承ったなのよね！」
「あの…南瓜ケーキがダブルで入りました…」

次々とやってくる注文に一人で手が回らず、何人かの冒険者が助けの手を挙げてくれ、マイゾーグは有難くその申し出を受ける事にした。

天井から吊るしてある肉を取るように頼まれ、脚立を出そうとした小人族のボーグルの男の戦士を止め、エルフの男性の魔法使いが爽やかな笑顔で軽々と手を伸ばす。それに見とれて南瓜の皮を剥いていた手が止まり、どやされる若いノームの女性僧侶。ドワーフの男の戦士が奥から樽を転がしてきて酒を注ぎ、店員達と一緒に人間の盗賊の男女が給仕を手伝う。そこは新米も熟練もなく、ただ皆楽しそうに騒ぐ冒険者の群れだった。誰かが噴水広場から吟遊詩人を連れて来て歌わせ、やんやと喝采が上がり歌に合わせて踊る者もいる。普段は一人で飲みたがる常連の孤高の剣士も喧騒に混ざり、顔だけ見れば仏頂面であるものの、口元は笑みの形になっている。また、常連の男性にここぞとばかりに自分の秘めたる想いを告げようとするグリエルが近付こうとするも、普段は酒場にまでは入って来ないその男性のエルフの妻に止められて厨房に引き摺られていった。

普段は酒を飲みながら悠々と調理するマイゾーグも必死に料理を作り続けながらも終始笑顔だった。自分はこの雰囲気味わいたいが為に料理人になったのかもしれないと、吟遊詩人の歌に合わせて鼻歌を歌いながら肉を焼き、ケーキを焼き、サラダの盛り付けに文句をつけた。

そんな大盛り上がりの酒場にこつそりとエルフの男性魔法使いの人狩りが入ってきた。気付いた数名が剣を抜こうと立ち上がるが、その人狩りの後ろに衛兵が立っているのを見て取ると剣を収めまた宴へと戻っていった。衛兵に捕まった人狩り・犯罪者は牢獄に入れられ長い苦役の時間を過ごさねばならない。その前にせめてもの恩赦であろう。衛兵も兜を脱ぎ寛ぎながらも人狩りの姿からは目を離さず、そして槍からも手を決して放さなかった。杖も取り上げられ、入口近くにあつた椅子に腰掛けた人狩りに近くのは少し距離を取るが拒絶はしなかった。恐る恐るマリーが注文を取りに行く。

「ご注文は…どうなさいますか？」

「……南瓜のサラダとケーキを頂きたい……」

「ああ…それと儂と、こやつ用に麦酒を頼むぞお嬢さんや。一杯位飲んで盛り上がりに参加してもバチは当たらんじやる」

そう言つて老齡のノームの衛兵は自分の角を撫でながらカラカラと笑つた。

料理を持って行き暫くしてから気になつて覗いたマリーが見たのは、泣きながらごめんなさいと繰り返し、それでも手を止めずに食べているエルフの男性と、優し気にその背中を見守る衛兵だった。

「この料理の味を忘れるんじゃないぞ。これを作ってくれた人の事を忘れるんじゃないぞ。野菜も肉も、そして無論の事、人様の荷物も奪つていいもんなんてありやせんのだ。何があつたかは知らんが、これを覚えて牢から戻ってきたらまた二人で酒を飲もう。儂は待つておるからな」

「……………すみません……………すみません……………」

ついに泣きじゃくつて手も止まってしまったエルフの男性を衛兵は優しい眼差しを込めてずつと背中を撫でてやるのであった。

怒涛の注文ラツシユも落ち着き、腹が膨れると今度は酒に走るものは常の流れである。樽が幾つも開けられ、ジヨッキが空けられ、人々の頭上で何度となく乾杯が叫ばれる。冒険に成功したものの、高難度の武器の鍛錬に成功したものの、強力な魔物の討伐に成功したものの、希少な指輪を手に入れて喜んでいゝもの。逆に命からがら帰ってきた冒険者達は、その苦い失敗を忘れるかの様に、涙で流れた分を取り戻す様に杯を空けていく。悲喜こもごも…全てを含め、酒場の夜はいつ果てるともなく盛り上がり続けた…。

大分遅くなってきた頃、冒険者達は三々五々に帰っていく。いつの間にかエルフの男性と衛兵の姿もない。行くべき所へ行つたのだらうか。綺麗に空になった皿が椅子の上の乗っているだけであった。皆、口々にマイゾグへ、美味かった、ありがとうと笑顔で声をかけ去っていく。普段は喧嘩が起こる事も少くない夜が今日は随分皆楽し気だったと、マイゾグが宴の後を見回すと、宣伝を頼んだノームの娘達が南瓜帽子を外すことなく笑顔で皆に挨拶をしていた。どうやら宴の間もずっと気を配っていてくれたらしい。インプすら拳の一撃で倒すマイゾグであったが今日ばかりはその剛腕を振るうのは料理だけであつて満足のいく夜であった。酒場の女性店員達も、疲れが見え始めながらも皆笑顔が輝いていて、今日の賄いと給金は特別豪華にしてやろうとマイゾグに思わせるに足るものであつた。

「いやあ、助かつたよお嬢さん達。今度来た時は一声かけてくれ。特別メニューを無料で提供させて頂こう」

「聞いた？これの為に頑張つた甲斐があつたわー」

「南瓜農家の面目躍如ですね」

「だから南瓜以外も作ってるし、お父ちゃんは立派な衛兵なんだから！」

「だから槍をいつも使ってますか？」

「それもあるけど、やっぱり鍬に似て使い易いというか……」

「だったら斧使えばいいじゃないですか……むしろ鍬で戦ってください……」

「カッコ悪いじゃない!!」

まだまだ元気なノームの娘二人に少々気押されながらも、マイゾーグは問い掛ける。

「お父さんは衛兵をやってるんだ？」

「そうですね！大きな街で頑張ってるほとんど帰って来ないけど、私と同じ角だから見れば分かるはずですよ。まさかこの街なのかな？詳しくは分かんないですけど」

「南瓜農家やるなあ……」

「だから南瓜だけの農家じゃないって！そもそも南瓜はね！日当たりが多少悪くても育つ優秀な野菜で……」

空いた食器を下げながら横を通り掛かったマリーはそういえば昨夜来ていた衛兵の角も南瓜帽子を被った娘と同じ形をしていたな……と思いつつも、大量の洗い物と化した食器達を厨房へと運ぶのに忙しく声を掛けることはなく動き続けた。

「おはようございます、イキューザックさん。今朝方、荷馬車タクシーで届いたトマトも美味しかったですね。」

「ああ、そうじゃろ？うちの家で作ったのじゃ。うちの子達も元氣しとるかのぉ」

「中々帰れない仕事ですからね、衛兵も。我々ガードナーもですけど」

「うちの生意気な娘も、もう年頃のはずじゃ。儂と同じでいい角なんじゃよ」

「兜を被つてると分かりませんよ」

「そうじゃったの」

そう言つて朝方、冒険者が旅立つ為の門の前にいるガードナーと衛兵がカラカラ笑いながら話す。彼らの後ろには今会話に出ていた水々しいトマトが門の脇に木箱に入れられ朝日を浴びながら、ちょこんと置かれているのであった。

後日振舞ってもらつた賄い。南瓜を素揚げして後入れするのがいいそうだ。

> i 3 5 4 6 8 — 4 4 6 3 <

さらに足りなくてカレーも食べる某角娘。

> i 3 5 4 6 9 — 4 4 6 3 <

南瓜話・余話 酒場の料理人かく語りき（後書き）

今回はまさかの酒場が主人公です。敢えて名前を出していないいつもの二人組はこっそりと過去も語っています。

槍と鍬って明らかに似ていません。

酒場の店員他は、結構取材したので、元ネタが分かると面白いかもしれない。備品もほぼ全て店内にあった物を使用しています。

実際人狩りさん（PK）も衛兵にばれないで辿り着けば食事が出るようです（目の前で食べてました）。当たり前前に食事を提供しているマイゾーグさんの優しい心づかいに感動です。

汝死を忘れるなかれ（前書き）

ようやくと本筋です。今回もドタバタな我等が角娘達に笑いながら
プレイしていました。

汝死を忘れるなかれ

「やっぱ上が塞がってないだけで随分気分が変わるわね」

「そうですね」

怪しい仮面を被り、やたらと低姿勢な態度を取る貴族の依頼により、ここ龍の神殿跡へとやってきたミューとリアの二人。何でもかつてこの大陸に存在していた龍人達が自分達の産みの親の龍を祀った神殿跡らしい。ただ、その龍人もこの地上から姿を消してどの位の月日が流れたのか。今やこの神殿もただの廃墟となつてしまい巫人等の巢窟と化している。ここには『宝珠』と呼ばれる秘宝が奉納されていると伝えられているが、実際に手にしたものは誰一人いない。その宝珠を持ってこいという依頼なのだから、仮面以上に怪しい依頼である。存在するかも分からない物にお金を掛けて依頼を出せるのだから、没落した等と口で言っていた仮面の貴族も自分達と比べれば雲泥の差の財力ではないかとミューは少しずつ貯めている自分の資金の事を考えると落ち込むのであった。

今日とはかく下見のつもりで気楽にやってきた二人。そう簡単には攻略出来る場所ではないだろうと、のんびり歩みを進めたのであった。

街から遠路はるばるやってきた遺跡の入口はちよつとした広間程の大きさはあろうか、拓けた場所となっており、光る謎の棒状の物体や石板等が置いてある。後は他のダンジョンと同様に癒しの泉が設置されている。二人はまず辺りを色々と見て回ることにした。

「何だろうね？この棒みたいなの」

「なんか帰還用の装置に似てますね」

「え〜っと…スイッチが二つあるわね。ポチっと」

二つあるスイッチの内一つを押したミューの姿が一瞬消えて、直ぐ様現れる。

「もう一個が必要みたいね」

「光っていないから機能してないのかな？じゃあこっちの石板を読んでみましょうか」

石板に近付き手を触れると、空中に文字が飛び出した。それによるとここはかつて存在した龍人達の産みの親の黄龍の、そのまた産みの親の神龍について、黄龍が語った知識について身につければ神殿の道は開かれるだろう…という様な事が書いてあった。

「つまり…龍人達のおじいちゃん？の事をよく知ってから来てねって事か」

「謎解きでもするんですかねー。とりあえず行きますかー」

そう言いながら早速通路をズンズンと進むリリア。横道を確認していたミューを無視して真っ直ぐ突き進む。

「あれ？リリアここ来た事あるの？」

無言で罫に嵌り、亜人に囲まれるリリア。

「リリアさーん？」

戦いながらまた罫に引っ掛かるリリア。そうこうする内に亜人に打ち勝つたらしい。回復の魔法で傷を癒しながらミューのいる横道の方へやってきた。

「そこ罨があるから気をつけ……」

言い終わる前に罨に嵌り、矢を浴びるリリア。

「……………リリアサン……………ボウケンシヤタルモノ……………チュウイヲ
……………ハライ……………マシヨウネ」

「しくしく……」

最近定番化してるのは何故だろうと本気で悩むミューであった。

最初の広間からすぐ近くの横道には再び石板が置いてあった。触れると先の石板と同じく文字が浮かび上がる。

『我らが父たる黄龍は祖たる神龍の末路を語った。楔を打ち込まれ
……』

「死に様を学べと……」

「ううむ……そうみたいですな」

「とりあえず控えときましょ」

持っていた羊皮紙に文面を書き込む。読み終わるのを待っていたかのように文字が消えると紋章が現れた。どうやら持って行けということらしい。ポーチにしまい込むミュー。

「もう用はないかな？進みましょう」

「ですねー」

先程の通路の奥へ進むと、入口にあったのとは形が違う棒状の装置

が立っている以外は行き止まりの様である。

「これに触れって事かな？」

「多分…」

二人して装置に触れると一瞬意識が無くなった様な感覚があり、別の場所が目の前に現れた。どうやらこれも転送装置の一種らしい。ただ、周りを見渡してみても戻る様の装置は見当たらない。

「一方通行なのかしらね？」

「裏側に何かありましたよー」

どうやら戻る様と思しき装置を発見する。これでいつでも帰れると退路を確保出来た事に安心し探索を進める事にした。

その後も同じ様に大量に設置してある罫に嵌り続けながら（主にリア）石板を探し進んで行くと、光の結界に阻まれ進めない場所に到達した。横には闇天使の像が置いてあり、調べてみると声が楔について問い掛けをしてきた。

「これをさっきの石板から得た知識で答えろってことね」

「謎解き燃えますね」

出される問いに先程書いた羊皮紙を見ながら慎重に答えるミュー。横では何も見ずにスラスラと答えているリアの姿があった。

二人共全ての問いに無事解答すると、像の持っている水晶が赤く光る。どうやら正解の様だ。

「リアすごいね！全部覚えてるんだ！」

「御神託です…」

何故か顔をあさつての方向に向けて答えるリリア。まあいいかと武器の確認をするとリリアに声を掛けるミュー。

「よし！じゃあ行くわよ！」

「あいー」

転送された先の巨大な岩で出来た怪物を軽々と打ち倒し、その後も同様に石板を探し、別の箇所転送された後であった。

手分けして石板を探しながら進んでいる途中でリリアが亜人達の群れに一齐に襲い掛かれたのだ。狭い通路だった為、逃げ場もなく攻撃を食らい続けてしまいうりりア。ミューは急いでその群れに飛び込むと愛槍で薙ぎ払いつつ小柄な亜人や自分よりも随分と身体の大きい亜人の戦士を少しずつ屠っていく。ミューが戦っている間に回復の魔法をかけようとしていたリリアだったが、怒涛の連続攻撃で遂に地に倒れ伏してしまった。

「リリアっ！よくもリリアを…！」

怒りに震え、自分の傷を顧みる事なく嵐の様に槍を振るい続けるミュー。全ての亜人を屠ったのはそれでも暫しの時間を必要とした。息を弾ませ赤く染まる視界で振り返るとリリアの身体は既にない。どうやら自力で復活した様だ。安堵の溜息を漏らし自分も傷を癒そうと少し移動して癒しの結界を発動させた場所は守護の像の目の前であった。

「リリア…。先に火を灯してたらここから出てきたんじゃないの…？」

暫く待ったが、リアの戻る気配もなく、仕方がないので一度街へと帰還する事にした。荷物が入手した物で埋まったわけでもないのだが、武器の修理と、リアと合流する為である。

一旦街へ帰還し、装備品の修理を済ませ街の入り口の門番横でリアを待っているミューは突然声を掛けられた。

「こんにちわ。ミューちゃんこの前大蔵室大丈夫だった？」

「あらカイさん。おかげ様で無事に探索が完了しましたよー。ありがとうございます」

「いいっていいって。今日もこれから冒険？」

「はい連れを待ってるんです。神殿跡を探索してまして」

「あそこかー。かなりきついみたいだね。俺もついて行こうかな」

「おお！いいですよー。助かります」

丁度癒しの結界の補充を終えたりリアもやってきて、パーティへ参加を快諾する。挨拶を済ますと神殿跡へと旅立った。

やはり戦士が一人追加されたパーティは非常に強力だった。岩で出来た怪物も二人の時とは比べ物にならない程早く倒すことが出来た。謎解きもさくさくと進み転送先の魔物の群れも簡単に屠る。物陰に隠された石板や、見落としがちな所にある通路で巨体の亜人の戦士に苦戦しつつも、特に戸惑うこともなく3つ目の闇天使の像へと辿り着いた。ここでは今までまるで見掛けなかった冒険者がたむろしており、賑わいがある。と、三人の目の前で像が光ったかと思うと死体が吐き出された。

「ひいっ！」

「今までの場所と違ってここからは相当きついみたいだな…」
「ちゃんと用意してから行きましょ…」

ここの謎解きは今までの集大成らしく、謎を解くのに加え今まで集めた紋章を実際に嵌めこむ事が必要だった。周りで頭を抱えている冒険者達はこの謎解きに悩んでいる者も少なからずいる様だ。

「よし解けたわ！」

「これでよしだなっ。リリアさんは？」

「…余裕です」

相変わらず視線を逸らして答えるリリア。怪しむミューが思わず問い詰めようとした所、謎を解いたミュー達一行に横合いから声を掛けてきた者がいた。ノームの戦士らしい女性とその仲間のエルフの男性に小人族のポークルだ。

「答えを教えてください、お代官様あ〜」

土下座して頼みこんだノームの戦士を尻目に、こそこそと相談する三人。

「（いや駄目だろ…俺達の苦労が…）」

「（教えてもいいんじゃないですか？）」

「（駄目よ！冒険者は自分で知識を積み上げなきゃ！）」

「（ミューさんが真面目な事を言ってる！）」

「（私はいつも真面目よ！！）」

相談がまとまった（？）ミュー達は振り返ると宣言した。

「いいでしょう！デタラメを教えて差し上げるわ！」

「そんな殺生な！」

「ウルサイ〜。自分達でメモして来なかったのが悪いんでしょう〜」

「おにーあくまー」

「えーと…ご神託をお教えしましょうか？」

「リリア駄目よ！つてご神託？」

何故かこそそと俯くリリア。そんな事をノームの女性と言い争っている内に、エルフの男性の方が謎が解けた様で声を上げた。ポークルが行くよーと声をかける。

「ふっふっふ。無事にうちらもクリアしたわよーん」

「あら良かったわね」

「これだけは言っておくわ！」

「何よ」

「ミツイ シンタク ギンコウ！！」

謎の言葉を叫ぶと、そのパーティは光に包まれて結界の中に入った。

「私達も行きますか」

「おうよ」

「はいです」

三人が光に包まれた結界の中は、少し通路が伸びその先に大きな広間になっている。そこで戦えという事だろうか。まだ奥にいろである敵に気付かれる前に、防御の魔法を全員にかけるリリア。カいはミューが先程の戦いで鼓舞したものよりも数段階気合いの入る掛け声をかける。さらにミューとカイはしっかりと腰を落として衝撃

にも備えられる様に丹田に力をしっかりと入れる。

「行くぞ!!!」

「お!!!」

「はい」

通路を進み広間に入ると見えてきたのは人の三倍近くの高さを誇る巨大な甲冑であった。無論持っている剣も人の二倍はありそうな凶悪な代物だ。

「うおおおお!!!」

斧を振りかぶったカイの横薙ぎで少しだけ後退するも、直ぐに距離を詰めて来る甲冑。相当丈夫な様だ。ミューの方は一番近くにいた甲冑に愛槍を力強く突き出すと、さらに足、頭と狙って動きを封じる。時たま繰り出される強力な大剣に一撃はこの際無視し、リリアの回復に頼る。普通の亜人ではとくに倒れているだろう量の攻撃を大分超えた所で甲冑は地面に膝をつく、ドウツと音を立てて地面にうつ伏せになり動かなくなる。安堵の息を上げる事もなく急ぎカイの方に集まった甲冑の群れに愛槍を振り回しながら突撃する。ミューの攻撃等無視する様にカイに攻撃を繰り返す甲冑のうち一体を素早く槍で連続突きを繰り出すと、かなりダメージが蓄積していたのか、先程の甲冑と同じ様に膝をつき倒れる巨体。その間にカイは数が減った甲冑を全て屠っていた。

「ふう。楽な仕事じゃねーやな。でも一人でやった時よりも楽勝だけど」

「え？カイさん一人で倒した事あるの？」

「ああ、障害物とか使って分断させて一体ずつだけだね。時間随分かかったよ」

「それでも凄いですね〜！」

甲冑の姿が宙に溶け始め、ミュー達を再び光が包み、結界の外へと無事に生還した。

戻ったミュー達一行が癒しの結界を展開していると、先程の一行も無事に帰ってきた。

「あらお帰り〜。骨を拾う用意はしてたんだけどねー」

「お生憎様〜。チャツチャと勝ちましたですよ！」

「良かったわね〜」

ミューとそうして話している間にノームの戦士のパーティはさつさと先に進んでしまった。

「どうでもいいけどあなた置いてかれてるわよ…」

「あうち！でも、これだけは最後に言っておくわ！」

「何よ。またさっきの謎の言葉？」

「ミツイ スミトモ カイジョウ カサイ カブシキ ジョウジヨウ
ウー…！」

呆気にとられるミュー達一行の前で指を突きつけ自慢げに宣言した後ノームの女戦士は走り去っていった。

「同じ事言うと思ってたのに、斜め上と言うか斜め下というか…。
面白いな」

「うん、何か楽しい一行だったわね」

「ミツイ…」

一人笑いを堪えるリリア。何か笑いのツボに入った様だ。

「私達も進みましょうかねー」

「おうあ」

「はいー」

一行は通路の先の光に溢れる道へと歩みを進めた。

光の先は守護者の像と、入口で見掛けた棒状の装置とがあった。守護者の像へ火を点した後に、三人で装置を調べる。

「もしかして入口にあったのと似てるから入口に行けたりして」

「そんな気がするな」

「使ってみましょう」

案の定、装置を起動すると入口へと転送される。折角なので街へと一度戻り、不要品の処分と消耗品の補充、お腹を満たす等して再び探索へ。今度は途中から進めるので随分と楽である。少し進むと入口付近と同様に石板があり近付くと文字が浮かび上がった。

『祖たる神龍は、その身を犠牲にすることにより、大いなる偉業を……』

「また謎解きね」

「厄介だな……」

「今度は真面目に書き取ります！」

じゃあさっきまでは…と言いかけたミューだったが、ドンドンと先

へ進み罫に引つ掛かるリリアに最早突っ込みすら忘れた。

「大丈夫か？リリアちゃん？」

「アアン…」

転送装置を発見し移動した先はかなり広い空間になっており、一行は亜人達の群れを倒しつつ石板を探す。今回は特に紋章が現れることもなかった為、書き取るとすぐに移動する。幾つか発見し、探索が完了したと判断し、横合いの階段から高台の登る事にした。棒状の装置から吹き出す炎の罫を掻い潜り先へと進んだ一行は遭いたくない者に遭遇してしまった。「人狩り」である。

小柄なポークル賊の戦士らしい彼は一行の前を歩いて亜人を一体屠った後、三人に全く気付く事無く癒しの結界を展開しその場に座り込んだ。

「（人狩りね…）」

「（どうします…？どうやっても見付からないで通るのは不可能ですよ）」

「（殺るか…）」

「（3対1な上に装備品を見る限り実力は同じ位と見たわ…）」

「（無益な殺生は…。もしかしたら見かけ以上に手練れかもしれないですよ…）」

そう声をひそめて物騒な事を相談している三人組を尻目に、人狩り特有の赤い気を放ちながらのんびりと寝そべり余裕なポークル。そして、相談する三人の横を一人の人間の戦士が通ったかと思うと、そのポークルに話しかけたのである。驚きに声も出ない一行。そしてポークルの方も武器を抜く事なくのんびりとそれに応える。

「いや〜さつきはどうもです」

「いいですよー」

「本当助かりましたよー」

「気にしないで下さいよー。まだまだ僕も贖罪中なんで色々あるんですからー」

「じゃあ俺奥行くんで、また会ったらお願いします」

「はいはいお気をつけて〜」

非常に和やかに会話は終わった。三人はまだ呆気に取られたままである。

「えっと…」

「物を盗む、冒険者含め誰かに攻撃を加える…で犯罪者・人狩りになるはずですから…、泥棒さん？」

「何か人殺しまではやってなさそうな感じだな…行こうか…？」

どうやらただの犯罪者らしい。三人は敵意がない事を示す為に武器をしまつて横を通過した。ミューが一応手を振って挨拶をすると、ポークルもにこやかに手を振り返してくれた。ちなみ彼の足元についての間にか用意されていた看板には「漂白の旅です ぼくわるいぽーくるじゃないよ」と記載されていた。何だか脱力したミューであった。

無事(?)に高台の上に辿り着いた一行は先程の戦士が倒したと思しき亜人の巨体を乗り越え歩を進める。今度はすぐに下りの道となっており、幾つかの棒状の炎の罫の先に岩で出来た巨大な魔物を発見する。完全に通路を塞いでおり、倒さない事には先へ進むことは不可能そうであった。

いつの間にか出来ていた流れで、防御の魔法で障壁を掛けようとしたリリアに気付いた岩の魔物は思いの他素早い動作で距離を詰める

と、岩の塊で出来た拳で殴りかかってきた。急いでミューが間に入るも、二人共強力なパンチに押し出されあまりの威力に身体が動かなくなる。離れようにも二度、三度と繰り返されるパンチでリリアが息絶えてしまった。横合いから攻撃を繰り返して岩の魔物の動きを止めようとしていたカイは舌打ちすると、ミューを引き摺り高台の中腹まで下がらせた。

「ありがとう…」

「危険過ぎる魔物だな…。リリアちゃんはここまで一人で戻って来れるか…」

「大丈夫だと思う。にしても強すぎる…」

少し待つとリリアがケロリと戻って来た。

「いやー酷い目にありました…」

全く問題なさそうなりリアを見てミューは胸を撫で下ろす。先程の攻撃で負っていた傷をリリアが癒すと、ミューとカイはしっかりと腹に力を入れて防御の構えを取り、さらにミューは愛槍をしまつと短剣と盾のスタイルに装備を換えた。防御の魔法もかけ直して貰い、カイの気合いの雄たけびと共に戦士二人は高台から一気に駆け下りると力を込めてそれぞれの武器を振り下ろす。カイの斧が間髪入れず二撃目を放つと魔物は流石に後退する。ミューのいつもの攻撃の流れである足、頭を狙った連続攻撃で動きも鈍くなる。勝機有りを見て取ったか、リリアも二人の傷の具合を見ながらも持っていたこん棒で殴りかかる。三人の怒涛の連続攻撃にとり、さしもの岩の魔物も崩れ落ちると地面の岩の一部となった。

「ふう…勝てたな。しっかし硬過ぎるわ、コイツ…」

「そうね。武器が歯こぼれするわよ。でも盾を使う暇もなかったわ」

「武器の傷までは直せませんからねー。私も」

巨体が塞いでいた道は真っ直ぐに伸びていたが、横道があったのでそちらを先に探ると石板を発見した。

それぞれに文面を書き写すと、続いていた道を進む。人よりも少し大きめの亜人が数匹徘徊している開けた場所に台があり、そこから梯子が上へと続いている。

「一気に行くわよ!」

「おう!」

「はいです!」

三人は武器を構えると、一行に気付かず歩いていた亜人に不意打ちで斬りかかる。あっという間に障害を片付けた一行は、台の上へと身体を乗せると一人ずつ梯子を登り始めた。先に登りきったカイから悲鳴が聞こえる。

「うわ!また岩の塊かよ!」

そう声がしたかと思うと、斧を岩にぶつける鈍い音がし始める。登ろうとしていたリリアを押しつけ、ミューは急いで梯子を登りきると、登ってすぐの場所でカイが戦っている岩の魔物の頭に思い切り短剣で斬りつける。少し欠けた岩のおかげか動きが鈍り、繰り出すパンチも先程のものとは比べ物にならないほど威力が落ちている。結局リリアが登り切ったと同じ位のタイミングで岩の魔物は地面に倒れ伏した。

三人が集まると、そこは広めの場所で、梯子側は切り立った崖の様

になっており、丁度反対側には闇天使の像が設置され、その先は淡い光の結界により一行の道が塞がれていた。像を調べると今まで集めた分の石板の情報を答える様問い掛けが始まった。

「ああ…私達がいるこの地域って炎の龍の名前から取ってるんだ。初めて知ったー」

「ミューさん知らなかったんですか？ちなみに前に話してたぱんつ泥棒が出たのは水を司る海龍の所らしいですよー」

「そんな変態は水で流してしまえばいいのに…」

そんな事を話している二人の横でカイは素早く問いに答え、二人を待つ間にそこら辺をプラプラと歩き始めた。先程の岩の塊でも調べようかと近付いてみると、何と岩が集まって再び魔物と化した。カイは慌てて斧を振り被って攻撃するも、魔物は問い掛けに答えている女性陣へと進む。慌てて解答を進めるものの、焦れば焦る程頭も働かなくなる。普段はさっさと答えられるはずのミューが焦って失敗すると像からミューに向かって緑の煙が吹き掛けられ思わず咳き込む。その間に答え終わったりリアは急いで岩の魔物の攻撃に参加する。咳き込みながら段々と朦朧とする頭でようやく答え終わった時には視界まで赤く染まっていた。

「ミューさん大丈夫ですか!？」

「あつあつあつ…」

「駄目だな…こりゃ。結界の間に進もう。また岩が動き出したら堪ったもんじゃない。入ってすぐ癒しの結界を張ろう」

「分かりました！行きますよミューさん！」

「あつあつあつあつ…」

光に包まれた一行は他の結界内と同じ作りの場所に到着する。通路が真っ直ぐ伸びており、その先の広間に倒すべき魔物が配置されて

いる為、案外この結界の入口付近は安全なのである。未だにクラクラしているミューをリアが寝かせている間に、カイが癒しの結界を展開する。普段使用している物よりも一段階上の結界を使用した様で、ミューの顔色もみるみる土気色から頬に赤みが差した健康的な色合いになってくる。癒しの光が少しずつ宙に溶け、完全に消える頃にはいつも通りの勝気な笑みを浮かべた戦士へと戻っていた。

「ミューさんふつかーっ！」

「あんまり騒ぐと見付かるぞ…。でも元気になって何より」
「随分元気になりましたね。これで大丈夫ですね」

ミューが軽くストレッチをして自分の体調を確認している間にカイが先の広間に何が配置されているかを見に行く。戻って来たカイの顔は固まっていた。

「カイさんどうだった？私は完全に行けるわよ！」

「今度はカイさんが体調崩しました？」

「……岩………岩の魔物が……この位いる……」

二人の前に広げた手を突きつけたカイの言葉の意味を理解した二人の顔も完全に固まった。

「とりあえずだ…。まともに相手して同時に戦つと勝ち目は無しだ」

「そつだね……」

「ですね……」

作戦会議をする一行。流石にまともに正面から掛かったのでは太刀打ち出来ないと判断した。

「俺が斧じゃなくて短剣と盾スタイルになる。で、敵を引きつけるから一体ずつミューちゃんが攻撃、リアちゃんはもう回復のみ。OK?」

「おっけーです」

「分かったわ。カイさんも気をつけてね。オトリの方が危険なのよ」「ミューちゃんにオトリを頼もうかと思ったけど、俺の方が丈夫だしね。それに俺は紳士だからね」

「頭に変態とかぱんつとか付けないでね」

「大丈夫ですか?」

「当たり前だ!俺にそんな趣味はねえ!」

硬かった空気が少し和らぐ。

「行くぜ...」

短剣と盾を装備し、軽くストレッチして走る用意をするカイ。

「あい」

愛槍を出して一振りするミュー。

「三人に神の祝福を」

防御の魔法を掛けながら祈るリア。

「そして我らに武運を!じゃあ俺が先行する。行くぜ...!」

カイが広間に走り込み、岩の魔物の気を引く。広間に幾つかある大きな石を利用して、ぐるぐると魔物を翻弄しながら走って逃げ回る。石に引つ掛かって少し動きが鈍った魔物をミューが槍で激しく突く。

たまにリリアの方へ向かう魔物も槍を振り回して土煙りを上げて自分に誘導する。カイが出来る限り気を引くものの、たまにミューへ数体同時に攻撃が行ってしまいミューの視界が赤で彩られる。それを遠目に見て危険と判断したりリリアがすかさず癒しの魔法で傷を治し、持ち直したミューが攻撃を再開する。いい流れが出来てきて、魔物が一体倒れ少し楽になったと戦士二人が思った時、リリアは逆に自分の精神力が枯渇しかかっているのに気付き、悲鳴に近い声を上げる。

「暫く魔法が使えません！ごめん！耐えて！！」

そういつて危険なのを承知で癒しの結界を展開する。ミューもカイも回復薬の瓶を口の端に加えて飲みながら避けたり攻撃を繰り返すも、少しずつ回復が間に合わなくなってくる。もう一体岩の魔物を地に返した時、回避が間に合わずミューがまともに魔物の打撃を食らってしまった大きく吹っ飛ばされ壁に叩きつけられる。「ミューさん！」「ミューー！！」二人の悲鳴と岩の拳が壁に叩きつける音が聞こえたのは同時であった。

されど 汝 死を・・・

ミューが気が付くと世界は色も音も無かった。

何度来ようと慣れる事はない世界。魂だけの世界だ。

冒険者を続けていく内に、「死」というものに自分は慣れてしまったのかもしれない。無の世界でミューは一人膝を抱いて座りこむと戦闘が終わるのを待った。

ミューが倒されてしまったものの、既に魔物の数が減っていた上に精神力が回復して魔法もふんだんに使えるリリアの癒しのお陰で、その後の戦闘はすぐに終わった。カイとリリアの二人がミューの死体に近付こうとしたところで、用は済んだろうと言わんばかりに光が溢れ、二人と一つの死体を結界内から弾きだした。

いつの間にか戦闘は終わっていた様だ。ミューは像の前に無造作に投げ出された無残な自分の身体を見つめ、思わず寒くなって自らの魂の身を抱きしめた。しかし、直ぐに気を持ち直し、誰もいない世界で走り始めた。自分の為に、仲間の為に。

誰も動くものが存在しないはずの世界に動くものがある。死神だ。死神は死体から離れた彷徨える魂を見つけると、その長大な鎌で魂を容赦なく削り取っていく。そしてその彷徨う魂を本来の居場所、器たる身体へと戻してしまう。死体に魂を乗せれば蘇ると勘違いした天使なのだろうか。いや、死神は結局死しか司る事は出来ない。何度もその鎌の餌食になれば、削り取られた魂の復活の可能性までもが削り取られてしまうのだ。

その死神が象徴とも云える鎌を掲げながら、先程の梯子の下を音もなく彷徨っているのをミューは見付けてしまった。

見詰めるだけで、その冷たさに魂も打ち震えてくる死神に捕まらずに済む様に、ミューは助走を付けて崖から一気に身を投げた。そして地面に接した所で一気に足を動かし走り出す。呼吸もしていないのだから意思の力でどこまでも進んでいける…はずだったのだが、走っていたミューの後ろから鎌を大上段に振り上げた死神が、容赦なく距離を詰めるとミューを意識ごと刈り取った。

気が付けば、また自分の無残な身体の上である。この繰り返される状態がこそが地獄なのではないかと思いつつ、今度はさらに慎重にそつと崖から落ちると、気付かれない内に全力で走りだした。今度は上手くいき、そのまま転送装置の先にある魂の守護者の像へと向かう事が出来た。

守護者の像。冒険者の命を司る運命の天秤はここでしか現れる事はない。高位の徳を積んだ聖職者であればその場で復活させる事も可能だというが、その余りにも果てしない高みへの道のりに、ミューは寺院以外でその様な聖職者に出会った事もなければ噂すら聞いた事もなかった。

生への想いを込めて像へと祈ると、目の前に運命の天秤が出現する。左の天秤に死の象徴のしやれこうべが赤い炎と共に置かれ、右の天秤に命の青い清らかな炎が燃えている。供物を捧げることで、この傾きを自分に有利にする事も可能ではあるが、生憎と戦利品も何も得ておらず天秤の傾きを変える事は出来なかった。一度死神に刈り取られたとはいえ魂の輝きは強く、いつもの様に直ぐに復活して二人の所へ戻れるだろうと復活への想いをミューは祈った。その時しやれこうべがまるであざ笑うかの様に怪しく傾いた事には気が付かなかった。

一向にミューが戻って来る気配もないので、ミューの死体を運ぼうかどうしようか悩んでいた二人の前で、無残な死体は突然灰へと変わった。青ざめる二人。灰になっても復活する事は可能ではあるが、もし灰の状態で蘇生に万が一にも失敗した時…存在は永遠に消える。やり直しは効かない。無になるのだ。運がよければ輪廻の輪に戻って来る事も出来るかもしれないが、例えばそれが一回りした所で、生前のその者には会う事は出来ない。絶対にだ。それは神すらどうしようもない永遠の消滅である。

「カイさん……ミューさんが……ミューさんが……」

顔面蒼白で震えるリリアをよそに、カイはじつとその灰の山を見詰め近付いた。荷物の中から何か包む物はないかと無言で探すカイに、リリアは角の片方にリボンの様に巻いていたバンダナを差し出した。

「つつつ…使ってください…。私が冒険者になる切っ掛けになった大事な人から頂いたバンダナです。私の祈りも籠っているはずですよ」
無言で受け取ったカイは、丁寧に余す事無く灰を包むと、絶対に落とさぬ様にと荷物の中に大事にしまった。

蘇生の失敗という結果に、天秤の前で茫然と立ち尽くしていたミューは突然魂が引つ張られるのを感じた。体験した事のない状態に思わず目を閉じ、開けた時に映ったものはカイの背中であった。どうやらカイに自らの魂が取り付いた状態の様だ。

カイはゆっくりと梯子を降りると、台の上から降りようとし、大柄

な亜人達に囲まれている事に気付くと隙を突けないかと辺りを伺った。

ミューの目には亜人達の姿も見える様になっていた。どうやら生者の視点も使えるようになるらしい。ただし音や色が無いのは相変わらずだ。さらに自分の意思で周りを見渡す事も出来る様だ。そしてカイの視点とは別に、ミューの意思で辺りを見回すと、死神がすぐ傍まで近付いている事に気付き息を飲んだ。ただ、死神は生者に手出しは出来ない為、亜人達の間を彷徨いながら、その何も感情のない目でじつと、カイを通してミューを視ているようだった。それはカイをも含めて亡者の世界に引き摺ろうとする暗い黒い意思の様で、ミューはカイの背中を魂の身でありながらも強く抱きしめるのであった。

カイは強行突破する事に決めたらしい。コボルトを無視して、炎の罫の設置している箇所に向かおうと走り込みかけて、再び動き出した岩の塊に道を塞がれる。思わずチツと舌打ちすると、岩の魔物はその音でカイに気付き亜人達がいる広間に一歩足を踏み出した。機を逃さず、空いた隙間へと走り込んだカイはそのまま全力で高台を駆け登り、駆け下り、転送装置まで休憩を挟みつつ、魔物の攻撃も存在も無視して一気に歩みを進めた。

ミューはカイの想いが伝わっていた。声は届かない。温度も感じない。そのはずなのに、「絶対助ける」という強い強い意思がその背中から嫌と言うほど伝わってくるのだ。諦めて放置してもいいだろうその灰を、ミューの戻るべき身体を彼は命を張って守ろうとしている。走りながら飛んでくる亜人の矢も、亜人が投げた巨大な石も彼の歩みを止める事は出来なかった。聞こえないのは分かっているも、ミューは彼の首に手を回して今は何も流れないその目を歪ませて感謝の言葉を口にしていった。

カイの必死の走りにより、街までの転送装置へと無事辿り着く事が出来た。カイが乱してくれたお陰で通り易くなった道をリリアが涙を堪えてついて来る。二人共お互いが無事である事を確認すると、街へと帰還した。

二人は街へと帰還すると真っ直ぐに寺院へと向かう。そして神官の前へと辿り着くと、荷物の中から慎重に包みを取り出したカイが、灰がこぼれない様にそつと地面に置こうとした。

魂の状態のミューも見えるのか神官がこちらに微笑みかけるが、それに応える前に、灰がカイの手から離れる前に、カイの姿がこの魂の状態でも分かる内に、ミューはその手の中の灰から振り向いてそつとカイに口づけた。

「ありがとうございます…」

地面に灰が置かれるとカイの姿は見えなくなった。取り付いていた状態が解除されたらしい。神官が語りかけて来る。

「彷徨える魂よ。汝現世へと帰る事を望みますか？それとも来世への望みを掛け天へと還りますか？」

「私は私を待つてくれる現世へと、この世界へと帰りたいです」

「では…祈りなさい。生への気持ちを強くその身に祈りなさい」

ミューは祈った。出会ってどの位の付き合いになるか分からないリリアを想った。きつと泣いているだろうリリアを抱き締め、その顔をいつもの笑いと優しさに満ちた顔に変えたいと祈った。

ミューは祈った。カイの自分の為に必死に走ってくれたその想いに

応えるために祈った。必死の強張った顔ではなく冗談が言える位明るく笑い合える様に祈った。ちよつと照れ臭そうな彼の笑顔を想った。

ミューは祈った。実家で今日も畑を耕し、自らの命となる作物を育て、大地に感謝し、実りに感謝し、自分を温かく育ててくれた母に、そしてあまり帰って来ないけれど、カラカラと笑いながら自分を抱きあげて、守る為の力を教えてくれた父に祈った。まだ成人していないけれど、自分の為ではなく人のために汗を流し、母の手伝いをし、笑って懐いてくる弟達を想った。

ミューは祈った。冒険者になる為に辿り着いたこの街で、沢山の出会い、沢山の別れ、その全てを分かち合った冒険者、街の人達全てを、出会った人全てを祈った。

ミューは蒼く清浄なる光に包まれ、自らの足で寺院の床へ降り立った。

予想とは違い、笑顔で飛び付いてきたリアを抱き返しながら振り返るとカイもよかったなど、とても優しい顔で見返してくれた。

「
た
だ
い
ま
」

ドタバタと復活を祝う一行に神官は静かに言葉を紡いだ。

「『汝死を忘れるなかれ』死は全ての人の直ぐ傍にあります。慣れ
てもいけません。忘れてもいけません。今こうして笑い合っている
我々も明日死ぬやもしれません。」

抱き締め合っていた状態からリリアと手を繋いだミューは静かに聞
いている。リリアも手をギュツと強く握り返してくる。カイも神妙
な面持ちですぐ横で耳を傾けている。

「でもこの言葉には続きがあります。『されど汝死を恐れるなかれ』
明日死ぬかもしれぬと、死に怯えた者が何かを成し遂げる事なんて
出来ようはずがありません。死を忘れず、恐れもせず進んで下さい
冒険者達よ。そして今日新たに生き返った若き命に祝福あれ」

ミューはリリアの手を離すと自然と神官に、そしてその上のステ
ンドグラスに、そしてその先にあるであろうものに祈りをささげた。

帰り際、寺院から出ようとした三人だったがミューだけが神官に呼
ばれ戻って来た。

「何でしょうか？」

「先程の件は黙っておきますよお嬢さん」

「さっきの件：あああ！！見えてたんですね！恥ずかしい〜〜」
「」

さっきまでの神々しい雰囲気ではなく、どこか茶目っけのある笑顔で
神官は指を一本自らの顔の前に出し、

「人は感謝を忘れがちです。生きとし生けるものに感謝なさい若い魂よ。そして汝の欲する様に生きるのです。ほどほどにね」

そうついて口の両端を上にあげたのだった。

「ミューさん何を言われたんですか？」

「ないしょっ」

「いいじゃん減るもんじゃなし教えてくれよー。なありリアちゃん？」

「そーですよー。神の前でもパーティの仲間の前でも平等ですよー」

「ないしょーー」

「気になるなあ…言っちゃえよ〜」

「ミューさん告解というものがあるので私だけに後で話してもいいんですよ〜」

「な・い・しよ〜〜〜〜〜！！」

三人は笑いながら寺院から出ていった。陰つて来た太陽の残滓が三人の影を長く伸ばし、寺院の中へと届かせる。

神官は若き三人に幸多かれと寺院の中にいる大人しい犬を撫でながら笑顔で祈るのであった。

「全く青春とは笑顔と隣り合わせですね」

されど 汝 死を・・・（後書き）

挿絵：>i35478—4463<

分かる人には分かると思いますが、かなり露骨なオマージュです。口づけのくだりは、どうすべきか最初に読んでくれた相方さんと一時間論争しました。

とりあえず結局三部作になりました。次回で攻略終了予定です。

黄龍去りし、龍人去りし彼の地にて（前書き）

間が空いてしまいましたが無事完成です。また長くなってしまう
した…。

黄龍去りし、龍人去りし彼の地にて

「よしっ！」

前回の探索で進んだ闇天使の像の横へと到着したミューは、解除された光の結界の先を見ながら気合いを入れる。

初めて灰になるという恐ろしい状態を経験した昨日は、復活して身体は元気だったものの精神的にはやはり疲れており、早々に宿を取り翌日三人でしっかりと食事を済ませてから、神殿跡の探索の続きをする事にしたのだ。宿の簡易的な寝台ですら生きているという実感がひしひしと感じられ、枕を涙で濡らしたのは内緒である。

「そろそろ行きましょうかー」

「気合い充分だな」

リリアとカイの二人も、気持ちを入れ替えて、モチベーションも高い。今日こそはと三人は未踏の地へと足を踏み出した。

未だ高台の上である目の前には、弓を持った亜人達がうろついておりミュー達三人を見ると距離を取りながら矢を放ってきた。地面に刺さった矢から緑色の煙りが上がる。毒矢の様だ。

「面倒だ！ 駆け抜けるぞ！」

「分かったわ！」

「援護します！」

斧を振りつつ、そのまま正面に見える崖の縁の方まで走るカイ。カイの斧に怯んだ亜人の弓を、槍で刻むミュー。さらに後ろでは防御の魔法を唱え終えたリアが、残った亜人を棍棒でぼこぼこ殴りつつ前の二人を追い掛ける。

「うわっ…もういいよ…岩は…」

先行していたカイが崖の縁から下を見下ろしつつ疲れた声を出した。梯子で降りる事の出来る崖の下は、長方形の狭い部屋の様になっていて、岩の塊で出来た魔物がうろつくと彷徨っている。

ミューとリアが追い付くと、カイは梯子に手を掛けつつ二人に声をかけた。

「俺が先に行って足止めするから、後から追撃頼む」

「任せといて！」

「はい」

カイが梯子から静かに降り立った為に気付かずに背中を向けている岩の魔物。そこにカイが思いつ切り斧を上段から振り下ろすのを見たミューは急いで梯子を降り、カイの横から槍で連続で突き上げる。慌てて振り向こうとした岩の魔物は、腕が壁に引っ掛かり思う様その豪腕を奮う事が出来ず、苛立つ様に身体を震わせていたが、二人の攻撃の前にまともに反撃する事も叶わずただの動かない岩へと還された。

「なーんか余裕だったわね」

「復活を遂げたミューちゃんは一味違っただけか？」

ニヤッと笑うカイの顔をまともに見るのが恥ずかしくて目を逸らす

「ミュー。」

「また石版ありましたよー」

リリアは自分が降りる前に戦闘が終わったので、そのままミュー達がいるのとは反対側を探っていた様で、二人に声を掛けてきた。

「はい、すぐ行くー。カイさん行くー？」

「うぬー」

そう言いながら定位置の背中に斧をしまったカイに、顔を見られない様に素早くリリアのいる方へ向かうミュー。戦闘中は平気なのに、さつきから自分は何なんだろうと思いつながら、何だか熱い頬を見られない様に石版から飛び出した文字を洋皮紙に書き写す。三人共に写し終わったのを確認すると、辺りを念の為確認するが他に進む場所等は特に見当たらなかった。仕方なく高台の上に戻る一行。

「今度は私が行くねー」

「はいー」

「二番手は俺だな」

ミューが梯子の一番上の段からそっと台の上を覗き見ると、仲間を殺された怒りか、殺気だった亜人達がまた数体集まっていた。

「また結構いる…。私が登り切ったらすぐに追い掛けてね」

「もちろん」

「はいはいー」

梯子を途中まで登っていたカイと、まだ梯子に手も掛けていないリリアに声をかけると、ミューは高台の上に身体を持ち上げ、素早く

槍を引き抜くと後ろの二人が登る際に矢を射かけられない為に、亜人達の気を引きながら中に飛び込んで行った。

距離を取って矢をつがえようとしている一体を追い掛けて壁際に追い詰める。と、その亜人がニヤリと笑った気がした次の瞬間、足元から衝撃が走った。爆発音と共に痛みが走る。どうやら地雷が設置されていたらしい。

衝撃で振らつくも、倒れはしなかったミューだったが、避けようがない至近距離で矢を放たれ、刺さった箇所から身体に悪寒が走る。力が抜け、槍を持つ手も震えてくるが気合いで持ち直し腰を入れて槍を片手で突き出す。しつかりと力の乗った一撃は亜人の戦士を動かない骸に変えるには充分だった。

梯子を登り切った二人も合流し、素早く他の亜人を打ち倒す。弱い毒だった様で、いつの間にか身体の震えも止まっていた。リリアが癒しの魔法で回復してくれる。

「混戦状態でも地雷を踏まないで戦うとは亜人達もやるなあ」

「自分達で仕掛けた罠にハマッてたら意味ないじゃないですか」

「そうよねー。リリアじゃあるまいし」

大分調子の戻ってきたミューの言葉にリリア以外は大笑であった。

亜人達の群れのいた広間に、再び転送装置を発見し三人で一緒に転送される。

今度は比較的広い場所に出た。高台では無い事に、落ちる心配はなさそうとリリアがそつと安堵の息をもらす。しかし、その安堵の息を聞きながらもミューとカイは逆に気を引き締め緊張した面持ちで辺りを探っていた。

なぜならば…岩の塊の巨大な魔物。亜人の戦士の中でも身体の特別大きな戦士。さらに先程と同じく弓をもった小柄な亜人がちらほらと周りを警戒している。

「なーんか…揃い踏みって感じね」

「ああ…岩にはもうお腹一杯だよ」

「うわあすごいですね…」

気付いたリリアも顔を引き締める。

「順番に来てくれたらいいが…そう上手くはいかんだろっな」

「片っ端から貫くまでよ」

「殴ります」

三人はそれぞれに気合いを入れると、一番近くにいた岩の塊に走り込んだ。

守護者の像を発見し、その裏側の岩場で癒しの結界を展開しつつ、思い思いに休む三人。

「きつかった〜」

「本当ですよー。二人共無茶し過ぎです」

「だってなあ。斧持ってたら突っ込むしかないしなあ。ミューちゃんも槍だと防御してらんないだろ？」

「え…あ…うん。そうなのよ。回避したり魔物の背後に周り込もうとしても中々難しくって喰らっちゃっから…さー」

そう言いつつ、顔が見えない様に寝返りを打つミュー。何だか乙女

な反応に自分で驚くミューであった。

結界の効果も切れ、改めて進むと光の壁が道を塞ぎ、その脇に闇天使の像を発見する。近付いて調べてみると例によって謎かけが始まる。

『それぞれの龍の役割を…』

羊皮紙を見ながら慎重に答えていく。同じ様にリリアが羊皮紙を見ながら答え、ミューが無事に正解した横で、カ伊に緑のガスが吹き出るのが見えた。

「カイさん大丈夫!？」

「ううう…メモが適当過ぎた…。ミューちゃん答えを教えてつかーさい」

「あゝ、うん」

先程の正解を読み上げる。結局自分で書いたものが信用出来ないのか耳をそばだてて必死に聞いているリリア。これで三人共無事に正解する事が出来た。

目の前で闇天使の持っている水晶が光り出す。

「いくわよーん」

「ご神託使えばよかった…」

「ありがとー。行くぞー」

何やらしよげているリリアが気になりつつも三人は光に包まれた。

再び光に包まれて無事に帰って来た三人。

「あれ？何かすつごい楽だったんだけど？」

「俺も思った。斧で吹き飛ばせるし、岩の塊程攻撃痛くなかったし」
「強くなっただんですかね」私達

一つ前の闇天使の結界内の岩の塊ごろごろに比べると亜人の戦士が数体いたのだが、随分とあっさり勝ててしまい、拍子抜けの一行であつた。

先程まで道を塞いでいた光の結界も消え、先へ進める様になる。朽ちてはいるものの、しつかりと形の残つた建物の様で、天井のある少し広めの通路が続き、横道が数本存在している。正面の道には亜人達がうろついており、気付かれない様に三人はそつと横道の一つの瓦礫で半分埋まつた狭い箇所に進んだ。瓦礫を抜けると正面の壁にはまるで街の衛兵の様な格好の骸骨が槍を抱えたまま朽ち果てていた。彼に何があつたのかは知らないが、少し隠れたこの場所は魔物にも見付からなさそうで、先程の戦いの傷を癒す事にし、結界を展開するミュー。リリアは遺体に祈りを捧げていた。

「ありがとうね」

「何でミューさんがお礼を言うんですか？」

「んー。私のお父ちゃんに似てたのもあつたし…私達もいつこうなるか分からないじゃない？だからその時に誰かが祈ってくれたら嬉しいなつて思つたら…何かね」

「優しいですねミューさんは」

ふふつと笑いリリアに、何となく照れるミュー。寝そべっていた力

イはそんなやり取りを見ていて思わず笑いがこぼれる。

「何よー」

「別に。なんかいいなあと思ってさ。俺も祈るわ」

「あー私も！」

こうして三人で死者に祈りを奉げる。願わくば自分達が仲間入りをするのは遠い先である様に、そして戦士に安らぎを。癒しの結界の優しい光に包まれながら思い思いの作法で祈る三人の姿は、まるで光天使の様であった。

瓦礫の隙間から外に出ると、先の回廊には亜人達が群れていた。横道を探索しながら石板を発見し、回廊の奥まで進もうとすると道の隅の宝箱の前に、紫色の瘴気を纏った魔物の姿が目に入った。慌てて回廊の反対側へ移動すると、その瘴気を纏った生ける屍はこちらを見てはいるが、近付いてくる事はなかった。どうやら宝箱を守っている様である。紫色の瘴気を纏った魔物は付近に生息している生き物に比べると破格の力を備えており、よっぽどの実力者でない限りは逃げる方が得策である。三人も、なるべく近付かない様に急いで横を通りぬけた。回廊の先は左右に広がる道になっており、右手に石板、左手に転送装置、さらには先ほど通って来た回廊の真上に出れる梯子まで掛かっていた。とりあえず石板の文字を書き写し、梯子の方へ向かう一行。何となく気配を感じたミューが、その出所を探ると先程の屍の守り人が、その場を離れないながらも、じつとこちらを見詰めていた。

「何か、さっきの人…ずつとこっち見てる…」

「触らぬ神に祟りなし。無視して行こうぜ」

「私達じゃ太刀打ち出来ないでしょうし、行きましょ？ミューさん」
「うん…」

二人に促されて梯子を登りながらも、未だ自分に注がれる視線は、憎しみではなく一抹の寂しさであった様にミューには感じられていなかった。

高台の上には亜人の戦士が控えており、台から叩き落とされない様に素早く始末をつける。軽く辺りを探索すると、柱の陰に隠れていた転送装置を発見し、そこから移動する。転送先はまた広い空間になっており、左側に横道、正面には大量の魔物の姿があった。

「いい加減終わりがしらね…。もう槍砥ぎに出したい感じなんだけど…」

「おうあ。俺の斧もそろそろ切れ味鈍ってきてるな…」

「逃げちゃいましょうか？」

「逃がしてくれるかな。こんな可愛いアタクシ」

「行こうかりリアさん」

「そうですねカイさん」

「ちよっと！最近冷たくないですか！お二人さん！ミューさん拗ねちゃっよ！」

騒ぐミューの口を塞ぎながら、一行は素早く横道に入る。どうやら気付かれる事なく進めた様だ。進んだ先はまた小さいが広間の様になっており、左手に石板が見えた。三人で今までの様に書き写そうと石板に触れるも、文字は掠れ内容はほとんど判別する事が出来なかった。

「うーん壊れてるのか？コイツ」

「今まで無事に読み取れたのが奇跡かもしれませぬ」

「古いとか言うレベルじゃないもんねー。仕方ないから先へ行きましょ？」

石板とは反対側に道が続いており、そちらに足を進めた一行。しかし、ミューは何やら気配を感じて慌てて振り返ったが誰もいない。先程の屍の件で神経質になっていただけだろうと、前を行く二人を追いかけて狭い通路を進む。通路の先は闇天使の像が設置しており、奥は光の結界が展開していて先へ進めそうにもない。展開している結界の先はどうやら目当ての祭壇の様だ。何やら今までとは違う気配が漂っている。

「ようやく最後までいだなー。長い道のりだったぜ…ホント」

「疲れた お腹空いたー。ちゃっちゃんと進んで帰りたいねー」

騒ぐ二人を尻目に、像を調べていたリリアが戸惑った声を上げる。

「あれっ？何かこれ壊れますよ…？」

「嘘ーん。ちょっと待って。あ…本当だ」

「何かちゃんと質問されないな…。どーすんだコレ」

他の像と同様に、声が聞こえるのだが、雑音が酷くてほとんど聞き取れない上に途中で声自体が止まってしまった。何度か試すが、状況は変わらず三人は途方に暮れてしまった。仕方なしに元来た道に戻ると石板のある広間で再び視線を感じるミュー。思わず立ち止まったミューを見てリリアとカイが不思議そうに見詰めていると、不意に風が吹いたあとと思うと石板の広間にローブの様な服を来たエルフの女性の幽霊が現れた。驚いている一行だったが、リリアがどうにか幽霊に話し掛けた。

「こんにちわ。お元気ですか？」

「ある意味息災ではあるうか…、こつも魂のみで生き永らえた我が身としては。最早健康等とは縁遠い我が身に何用だ冒険者達よ」

随分と古風な言い回しだが、話は聞いてもらえる様だと分かり、先程の像について聞いてみる事にした。

「ふむ…。さしもの長きにわたる年月に、装置も壊れたるか…。あれは竜人の遺産足る故、我が力にて修復等出来ようはずもない…。が…もし、彼の者がまだおれば直す事も可能やもしれぬ」

エルフの幽霊の話によると、修復出来る技師がまだ同じ様にさ迷っている可能性があるとの事。その幽霊が見付ければ修復出来る可能性はあるだろうという事であった。しかし、この広い神殿の跡地内をどうやって見付けたらいいか…、やはり三人は途方に暮れてしまった。

とりあえず腹が減ったと騒ぐミューの意見に賛同した一行は一度街へと帰還する事にした。鍛冶屋で武器を修復して貰い、食事を取り、気力は回復した三人は再び神殿跡地へ向かった。

「さてと…どこをどう探したらいいか…。ミューちゃん当てはある？」

「全くないわねー」

そう言いながら膝を抱えて座り込む。横ではカイも寝そべってしまった。

「分かりました！」

「ええ何よりリア!？」

「リアちゃん分かったの!？」

「御神託によりますと…」

リアの御神託?によると、どうやら第一層とも言うべき場所の最後の方、二人で探索していた時に、リアが一度倒れてしまった辺りらしい。半信半疑ながらも、その場所へ向かうと、空気が揺らぎ僧服の様な物を着込んだ人間の男性の幽霊が現れた。早速修理が出るか尋ねる事にした。

「フム…。永きに渡り残りし我が身にその様な質問する輩が来ようとは…。中々興味深きものである事よ。しかし我としては、答える義理等あるうはずがないが…」

急に雲行きが悪くなり、あのエルフの女性の幽霊から聞いて来た事を告げる。

「…………その名を耳にするのは久方振りであるな…………。あい分かった力になるうぞ。されど、既に我が身は朽ちて久しい。助言をしてやるう冒険者達よ…」

この男性の幽霊によると、どこかに修理する道具箱がある可能性があり、それがあれば直せるだろう…と、随分とあやふやなものだった。希望はあると礼を述べて去ろうとした一行に幽霊はポツリと呟いた。

「…彼女に…よろしく伝えてくれ…。…感謝する…………冒険者よ…」

振り返ると幽霊はまた風に溶けていく所だった。最後に少しだけ見えた表情が笑みに見えたのはミューの気のせいだったか…。風が吹いた後に確認する事は出来なかった。

あまりにも広い範囲の搜索に根を上げそうな一行だったが、またまたリリアの御神託により、迷いなく発見する事が出来た。早速直しに行こうと、再び最奥へと進む。現れたエルフの幽霊に事の顛末を告げる。

「……………そうか……………。其れあらば像の修理も可能であろう。宝珠は、
斯様に朽ちた場所に相応しい物ではない…。持ち出してくれ冒険者
よ……………」

そういつて頭を下げないまでも、懇願する気配に一行は必ず手に入る事を約束した。

先へ進み像を習った通りに修理道具を使って修復する。改めて像に触れると無事動き出し、水晶が赤く光り出す。

「これで…最後だな…」

「正念場だね！ミューさん頑張るよ！」

「精神力も回復しました。ガンガン行けます！サポート任せて下さい」

「行くぞ〜！」

そして光に包まれて三人が結界内で見た物は…。

「うわぁ！嫌だ！あり得ない！何なのあれ気持ち悪い！！カイさん任せた！」

「ミューさん、ごーー！！！」

「やだ！リリア行きなさいよ！触りたくもないあんなの」

「君達口はいいから攻撃しなさいー！」

「ミューさん私『かえる』！」

「リリア上手い！」

「いいから攻撃してくれ〜〜！！！」

あまりの巨大なものに悲鳴を上げながら戦う三人は、さほど苦勞することもなく文句言いながら討伐に成功した。

「ふう…いい仕事したわね…。ぬめぬめする」

「ミューさんその槍近付けないで下さいね…」

「え〜何だつて〜。リリアさん何か言いましたか〜〜〜？」

「きゃああああミューさんのばかりー！。髪の毛に何か付いたああ

！」

「君達元気だね。でも何か結構楽勝だったなあ」

「だって一体だけだもん。図体でか過ぎだけど。早く『かえる』私」

「そうですね私も『かえる』」

「君達ボケなくていいから…」

こうして無事に結界から出された三人は、高鳴る胸を抑え奥へと続く道へ足を踏み入れる。案の定そこは広い空間に靈気漂っており、大きな祭壇が真ん中に設置されている。祭壇のすぐ手間の石板には宝珠が安置されていた。

「これか…」

「これね…」

「これですね…」

目的の物である宝珠を手に入れた三人。この目当ての宝を手にした瞬間こそが冒険者の一番の感動の場面の一つなのかもしれない。辺りを散策すると、街へと直接帰還出来る装置が見付かった。長く険しい巡礼の旅も帰りは優しいらしい。

「うし！帰ろうぜー！」

「そうですね、ってミューさんどこ行くんですか？」

「ちよつと報告してくる！何なら先帰ってて！魔物もいないみたいだし」

そういつて祭壇の間から離れ、先ほどのエルフの幽霊の場所へと駆けて行くミュー。何だかんだでついてい行く二人。まだその場に残っていたエルフの幽霊は三人が近付き、宝珠を出したのを見てとると、感慨深げにそつと息を吐いた。

「……そうか。宝珠を手にしたのだな冒険者達よ。感謝する。だが、ゆめゆめ忘れるな。其は我らが仕えし黄龍の宝珠。邪な気持ちで使用するれば、何が起こるかは分からぬ。…とにかくここから持ち出してくれた事に礼を述べる。ありがとう勇敢なる冒険者達よ…」

そういつて、フツと目を細めたエルフの女性は、たまには会いにも行ってみるかとお小さく呟くと風に溶けていった。その最後に見えた横顔は、達観したものではなく、恋慕の様な感情のある表情だったのをミューは見逃さなかった。

祭壇の帰還装置へ歩きながら三人は話す。

「ミューさんこの為に戻ったんですねー」

「だって、やっぱり頼まれたら結果を見せないとさー」

「律儀だねえ。俺はてつきりまた腹減ったとか騒いでもすぐ街へ帰るかと思つたよ」

「そんなに食べる事ばかり考えてませんー!!」

「いざとなつたらその被つてる南瓜食べられますもんねー」

「嫌よ…、何か又メ又メ付いてるし…。というか洗つても食べないわよ!」

「じゃあきつと種を植えるんだな。流石農家」

「カイさんまで農家農家つて…」

「ホラ帰りますよー。お風呂とご飯が待ってます!後、依頼の報告も!」

「先に報告でしょ!リアも十分食い意地張つてるわよねー」

「まあ腹減つたのも確かだし、とにかく帰ろうぜ。我が街へ」

きやいきやい騒ぎながら一行は街へと転送されていった。騒がしかった祭壇の間も、すぐに風が吹いて彼ら彼女らの足跡や声も流してしまい、常の静寂に戻って行った。聞こえるのはただ風の音だけであつた…。

街へ帰還し、怪しい仮面男に宝珠を差し出すと、また異常なまでの低姿勢で礼を述べられ、報酬はギルドに払い済みだというのでギルドへ。無事に大量の報酬と、常にはない沢山の言葉の言葉を掛けてもらった。

「いやあーホクホクですね!私新しい棍棒買ったちゃおうかなー」

「いいんじゃないかな。あれ?ミューちゃんは?」

「何か買物あるから、寺院で集合！って言って雑貨屋さんに行って行きましたよ」

寺院で待っている二人に、ミューが息を切らせて駆け込んで来た。二人には目礼だけすると、まず神官に無事に冒険が終わった事を告げ、入口付近に座っていた二人に声を掛けた。

「で、何なんですか？ミューさん。もうお腹空きましたよー」

「うん、そろそろ教えてくれてもいいんじゃないか？」

「うっふふふ。じゃーいーん」

ミューがポーチから出したのは、離れた人同士でも会話が出来る指輪の作成用の物だった。これを付けている人同士で指輪に向かって話せば、その人達のみで会話が出来るのである。

「この前ね、街で配布してる人がいてさ。私は今、人狩り情報を教えてくれる指輪を付けてるんだけどね、今日の記念に作ってみようかなって三人用に」

「へえ〜その人狩り情報の欲しいですね！」

「あ！俺も欲しい！」

「後一個しかないからどちらかね〜。で、私達の指輪の名前は何にする？」

「うーいん。*コボルトのなかにいる*」

「カイさん却下」

「南瓜娘と愉快な仲間達」

「リリア却下！いい加減南瓜から離れてー」

うんうんうなりながら三人で悩んでいて、ふと寺院の外を見ると、一匹の蝶が風になびいている飛んでいくのが見えた。

「さすがに寝る時は外すわよ」

「残念。寝物語に口説いてあげようかと思ったのに」

「ちよつと…カイさん本当にやめてね…？」

「あれ？ミューさん顔赤いですよー。どうしたんですか？」

「べ…別に何でもないのでございますわよ。リリア何か落ちたよー」

寺院から出て酒場へ向かう道をのんびり歩く三人。リリアのポーチから何やら本のようなものがバサリと落ち、ミューが拾うとリリアが慌ててその本を隠そうとするが、ファイターらしく華麗にステップで避けたミューは捕まらない。

「えーと、なになに…あーでべきゅー 黄龍神殿攻略編 何これ！
！」

「あーあのその。冒険者の皆さんが集めた情報をまとめてくれてある本なんですよ…。酒場で貰いました」

「えー…それって…。じゃあ御神託ってまさか…リリアー…
！？」

「さっカイさん行きましょ。先に酒場で場所取りしてますよー」

「ちよつと待ちなさいリリア！こらあーダメでしょー！自分で考えないと…！！！」

「後半は使ってませんよ」

「元気だなあ二人共。おじさんはついていけません」

「カイさんはまだおじさんって年でもないでしょー！カッコい…。
ほらカイさん走って！」

「何で俺まで…」

「リリア待ちなさいーいー！！」

「気力だっしゅー」

何故かダンジョンの中よりも早く走るリリア。追いかけるミュー。やる気なくも走ってついていくカイ。気が付けば三人で冒険してい

た一行。また一つ成長出来たと笑いながら走るミューの目の前を蝶が飛んでいった。今日も元気に風車も回っている。鍛冶屋の工房から上がっている煙も風でたなびいていた。風のように笑いながら酒場へ駆け込んで行く一行。追い風は若い冒険者達にしっかりと吹いている様だった。

黄龍去りし、龍人去りし彼の地にて（後書き）

あーきぺでゅーさんは便利ですが、頼ると冒険が色あせます。謎解きはご自分で解くのが面白いかと思われます。黄龍最後の決戦場は露骨に伏せてみました。プレイしない人の為に露骨なヒントも散りばめました。あれは本当に見て驚きと気持ち悪さが…。

TOPにも記載しましたが、トレジャーハンターのハル君の外伝がアップされました。ミューの幼馴染のイケメンエルフがドタバタしている冒険譚です。これで外伝含めて三人が書いています。広がる世界にワクワクします。

名犬の城跡で（前書き）

今回は書くのに非常に時間が掛かってしまいました。ほぼ全員一回しか絡んでない方だったので苦労しました。

名犬の城跡で

神殿跡での冒険を終えてから数日後の事、ギルドからの甲虫退治や
亜人退治の依頼をまったり受けながらのんびり過ごし、今日はもう
休もうと定宿のエコノミーな部屋に戻ったミューへ、手紙が届いた
と宿屋の女将が扉を叩いてきた。手紙の礼を述べ、兜の中にしまい
こんでいた髪の毛を解きながらベッドに横になろうとしたミューは、
しかし手紙の内容を見ると慌てて髪を結え直し、荷物を持って外へ
飛び出していった。

『拝啓 ミューちゃんへ 城跡でお宝発掘しようじえい この手紙を
読んだら即「城跡」へ来ること。 デイジー』

- 城址 -

昔話にもなっている犬の名前を冠したこの城跡は、今でも多数の宝
が眠っており、冒険者達の恰好のダンジョンとなっている。今でも
仕掛けが多数残っており、侵入者してきた冒険者達を悩ませている。

「すいませ〜ん！遅くなりましたー」

街の入口でダンジョンへの移動を担っているガードナーに慌て過ぎ
て驚かれながらも、どうにか城跡に辿り着いたミュー。転送してき
た先に数人の冒険者がいたので声をかけたのだが、デイジーの姿は
なかった。そこにいたのはノームの女戦士と僧侶、エルフの男性の
魔法使いの三人であった。

「大丈夫よん、全然待つてないし。私エルサねー。デイジーちゃんから助っ人が来るって聞いてるよん」

「俺はカリッド。見ての通りのイケメンだ。惚れるなよ」

「あ…私はアイシです…。よろしくお願い致しますです…」

デイジーの知り合いだというノームの女戦士がエルサ、横で気障つたらしいポーズを取っている男性の魔法使いのエルフがカリッド、緊張しているのか言葉がたどたどしいの感じのノームの女僧侶がアイシだ。

「とりあえずミューちゃん。ここはどこまで攻略してる？」

「え…あ…見るのも来たのも初めてです」

「OK。じゃあ俺様が手取り足取り教えてあげようじゃないか」

「ミューちゃん聞き流していいからねー。コイツこんなんだから」

「こんなんとは失礼だな！こんなイケメン捕まえて！」

「いいから行くよーん」

どうやらエルサがリーダーの様だ。落とす格子を引き上げて城内へと進む。エルサ、カリッド、ミュー、アイサの順だ。すぐに長い下りの階段になっていて、再び落とし格子で塞がれていた所を抜けると、天井の高い広間となっていた。広間の中心に随分と高級な服を身に着けた男性の幽霊が立っている。城の名前にもなっている犬の名前を呟いていたかと思うと、いきなり頼みごとをしてきた。他の三人は既に依頼を受け解決した事があるのか素通りだ。何でも毛皮と骨と肉を集めて来いとこの事。幽霊にこんなものを渡して何に使うのかは気になるミューであったが、請け合う事にした。見事持つてくる事が出来たら水晶をやるうとも言い含められその場を後にする。

「まず毛皮かな。どーするよ？踊り場でよくな？」

「踊り場だねー。ミューちゃんアイシたん行くよー。アイシたんは久々のパーティー戦なんだからのんびり慣れてね」

「はいです。さあ行きましようかミューさん…」

「あ…ハイ…」

初めての場所な上にデイジーからの助っ人というプレッシャーで緊張しているミューと、癒しの魔法の手順を確認したりしておっかなびっくりのアイシの二人が、前の二人に引きずられるように進んでいく。広間を抜け、目の前に広がる吹き抜けの所で右手側に進む。通路の端にいたコボルトが一行に気付いて走りこんできたが、エルサの斧の一撃と、カリッドの炎の魔法で一瞬で消し炭となる。そのあまりの力量の差にミューの胃は緊張で上がってくる。

「ほらほら〜サクサク行くよ〜」

また落とし格子を跳ね上げて、すぐ近くにあった階段を下る。小さな部屋になっていたそこへ入ると、生ける屍と虫がワラワラと襲い掛かってくる。素通りして先へ進むエルサとカリッド。道を知らないので捕まるミューと、何故か引っ掛かっているアイシ。

「ひいいい虫が！何か屍からぬめつとした何かがあ…。うわ！腕が伸びたあ！」

「気持ち悪いですうー。寧ろ回復が間に合わな…」

カリッドが振り返りぶつぶつと呪文を唱えると、炎の塊が膨れ上がり、虫も屍も燃やし尽くした。

「ほら、行くぜ二人共。燃やすのは女の子のハートだけでいいっつーの」

そういつて髪の毛をかきあげる。複数の意味で呆気に取られたミューとアイシの二人は礼を述べ先へ進んだ。

部屋を仕切っていた落とし格子を跳ね上げると、そこは手摺りも何もない回廊だった。そつと下を覗いてみるとかなりの高さがあり、下からは断続的に炎が吹き上がっているのが見える。エルサとカリツドは脇目も振らず通過する。

「足元滑らせて落ちたら即死するわね…これ…」

生唾を飲み込み、おっかなびつくり進むミュー。道自体には慣れているらしく、さつさと進むアイシ。置いてかれると焦ったミューの目の前で炎が上がりアイシが焦げる。

「あちち…」

「……………(リリアみたい)……………」

心の中でよく似た誰かを思い出さずにはいられないミューであった。

青白い屍のいる部屋が業火に赤く染まり、さらにエルサの斧でザクザクと粉微塵にされる。その残骸を漁っていたエルサが、骨と肉をミューに差し出す。

「ミューちゃんこれね」

「あ…はい、ありがとうございます」

渡された血も滴る怪しい肉片は他の荷物を汚さない様に、乾燥し切った骨は折れない様に袋に入れてからポーチにしまいこむ。返り血すら浴びず無傷なエルサの実力と同じ戦士として粗相が無いようにと冷や汗をかきつつ、奥へと進む一行を慌てて追いかけるミュー。少し先の部屋で立ち止まって戦闘の用意をしている三人に追い付いた所で、すぐに声を掛けられた。

「じゃあミューちゃん！適当にね」

「え！あ！はい？」

「大丈夫大丈夫。一緒に踊ろうぜ死の舞踏を」

「回復…えつとみんなまとめて回復する場合は…えつと…」

何だか分からないうちにミューはその先へ連れて行かれた。

緩やかな傾斜の下りのスロープがあり、文字通りダンスが出来そうな広さの踊り場があり、奥にはまた登りのスロープがあり先へと道は続いている。しかしミューはそこまで見た後は余裕が全くなかった。何故ならそこは野獣の亜人であるコボルトの巣窟となっていたからだ。

入って来た側のスロープの上で、カリッドが威力を抑えた火球を放ち、それで苛立ったコボルトが近付いてくればエルサが斧で薙ぎ払う。時々自分から進んで行ってコボルトを呼び、カリッドの射程範囲に入ったコボルトは業火に焼き尽くされる。コボルトの持っている汚い短剣の攻撃をたまに食らってしまった傷はアイシがまごつきながら癒しの魔法で治していく。怒涛の勢いに、混乱しながらも気付けば目の前にコボルトの獣臭い息があり慌てて槍を突き出すミュー。遺跡や下水にいるものよりも随分と強靭な身体らしく、怯みも

しないその野獣にこちらが逆に気押されそうになりながらも必死で槍を繰り出す。

いつのまにか戦っている内にコボルトの中に飛び込んでしまっていたらしい。四方八方から獣の息、叫びが聞こえ…気付けば自分の身体を見下ろしていた。魂の状態でほとんど覚えていない道を、死神にも会わずに無事に入口の守護者の像へ辿り着き復活したミュー。魔物を全て無視し、気力の限り走って辿り着くと踊り場の前で三人が待っていた。

「……皆様すいません……」

「いいよん。無事で何より」

「おいおい頼むぜ。もっと俺の背中頼っていいんだぜ」

「回復間に合わなくてごめんなさいです……」

「いや…槍が抜けなかった私が……」

「でも僧侶の私が……」

「戦士なのに弱い私が……」

「はいはい、二人共！角ぶつけ合っていないで〜行くよー」

謝罪合戦になってぺこぺここと競い合うように頭を下げ続けているミューとアイシを引き剥がしたエルサは、斧を背中から外して構える。

「じゃもう一回ね」

「ミューちゃんは俺の後ろな」

「はいい……」

カリッドはそう言うと呪文を唱え、スロープ上に小さな竜巻を作り上げた。火球で呼びこまれたコボルトがそれに触れると切り刻まれて吹き飛ばされる。警戒する気が無いほど気が立っている様だ。

「はい、隙間から攻撃しちゃって」

「あ、ありがとうございます」

風の障壁のお陰で消耗も少なく、気付けばコボルトの群れは沈黙して死体の山が残るだけであった。手分けして死体から使える物を漁る。

「はいミューちゃんこれ」

比較的綺麗な毛皮を剥ぎ取ったエルサがミューに手渡す。

「これで揃ったな」

「後はギルドの依頼は…盆踊りでいいねー」

「盆踊り??」

「はい行つくよーん」

幾つかコボルトが隠し持っていた宝箱があるが、開けることもなく三人が移動する。勿体ないけれど、遅れないように慌てて追い掛ける。先程の入口にいた幽霊に話掛け、集めた物を渡すと喜んでそれを握ね繰り回しながら城の由来にもなった犬の名前を呟いていた。どうやらこれで犬が復活すると信じている様だ。ただ、とても必死なその様子は、犬が本当に愛されていたのだなと感ずることが出来てミューは何となく温かい気持ちにもなった。材料が材料だけに犬が無事に蘇るとはとても思えなかったが。今も魂自体はこの城の付近に居るのだろうか。もしかしたら今も守っているかもしれない。犬は人に付くというし。こんなに思われていたらもしかしたら…、そんな事を考えながらも報酬代わりに水晶を渡された事を告げ一行は奥へと進む事にする。

入口から見て今度は吹き抜けを左側へ。落とし格子を上げて、広い空間に出る。そこにうごめくのは、見たことが無い程のあまりにも大量の生ける屍の群れだった。先導する三人に悲鳴を押し殺しながらついていくミュー。大きな四角い柱と柱の間に陣取り、先程とほぼ同じ作戦で戦い始める。動きの速い青白い屍体と、赤く焼けただれた様な身体でゆっくりと確実に距離を詰めてくる屍体。両方共にエルサが斧で薙ぎ払いつつ注意を引き、集まった所をカリツドの業火が焼き尽くす。肉の焼ける臭いに鼻が曲がりそうになりつつ、群れからはぐれた屍を槍で突つくミュー。カリツドの後ろではアイシが癒しの魔法を絶やさぬ様に、結界で自身の精神力が切れぬ様に頑張っている。

「よし！撤退しよ！」

「はいよ」

「分かりましたです！」

「え！？どこに！？」

一定の数を屠った所で唐突に戦闘を切り上げ、目の前にいた屍を押し分け三人が素早く移動する。急いで後を追うミュー。入って来たのとは別の方向に落とし格子があり、そこを潜ると目の前には閻天使の像があった。数体追って来た屍はカリツドとエルサの攻撃で動きを止める。

「先にここだねー」

「そうだな」

「癒しの結界張りますねです」

「え！？あ？はい？」

勝手知ったる三人は手早く傷を癒すため、精神力を回復する為に結

界を張ると各々休み始めた。奥には確かに光の結界が道を塞いでいる。

お手伝いで来ているとはいえ、既に全てを分かっている先人に連れられ、何も分からぬままに気付けば淡々と攻略が進んでいくのは辛い。リリアやカイと一緒にぎゃーぎゃー言いながらものんびりと自分の力で探索を進めたいな、そう思っただけで立ち竦んでいたミューは足元から何やら視線を感じてそれを追うと…寝そべったカリッドの嫌らしい視線だった。

「いやーハーレム状態だし、綺麗な『おみ足』も見えるし極楽の極みだね」

「ミューちゃん、その変態は魂にしてあげてもいいよー」

「でもミューさんも犯罪者になっちゃうからヤですよー」

「何で俺は殺されるの前提なんだ…」

「視線が犯罪レベルなのよー」

三人の会話に入ったものか、ここは突っ込むべきかどうか悩んでいる内に結界の効力が切れた。

「さっ狩りのお時間だぜ」

「いっくよー」

「詠唱の方はバッチリです！」

「あ…はい行きます」

ミューが水晶をかざし、一行は光に包まれた。

転送された先はそこそこの大きさの部屋になっており、横には道も蛇行して続いている。それよりも目の前で何故か整列している赤茶

けた屍がミューは気になった。部屋の四方に数体ずつ固まって何かを待っているかの様だ。と、突然動き出したかと思うと、部屋の中央に転送されていた一行目掛けて一気に突っ込んできた。ここに来るまでに戦った屍系の魔物よりも数段速い動きにもみくちゃにされるミューとアイシ。

「ひいひい！！！」

「押さないで下さいいひい慌てないで下さいいひい！！」

一足早く動いたカリッドが壁際に寄り、エルサは持っていた斧を振り回し、真空の刃で屍の群れを吹き飛ばす。一緒になってコロコロと転がるミューとアイシ。

「すみません…。アイシさん上からどいてー」

「あああ降ります降りますくきゃいふくを…キユウ」

ふらふらしている二人をほおっておき、カリッドが風の障壁で敵を吹き飛ばしながら一まとめにし、エルサが斧で薙ぎ払っていく。ようやく立ち直ったミューが槍で少し突くと、屍がボロボロと倒れて行く。あつと言う間に赤茶色の山が積み上がる。

「あれ？結構弱い？」

「勢いが凄いいけどねー」

一行は光に包まれ、元いた場所へ転送される。奥の落とし格子の場所にあつた境界が解放され、先へと進めるようになっていく。と、落とし格子が跳ね上がって巨大な石像がこちらに踏み込んで来た。ミューの三倍の高さはあるような巨体なのに動きは存外速く、エルフのカリッドの身長すら超える巨大な石の塊で出来た剣を突き刺し

て来る。エルサがそれを避けつつ斧を横薙ぎに払って吹き飛ばし、像がやってきた奥の部屋に押し込む。慌ててミューも追いかけて、像の側面から槍を連続で突く。石で出来ている為、非常に硬く手が痺れるが攻撃の手を休めると自分の側にも剣を振られそうので、一所懸命に槍を繰り出し続ける。結構な量の攻撃を加えると、像は剣を手放し地面に膝、胸とついて動かなくなった。

「たまりにこっちに入ってくるんだよねー」

「びっくりでしたーです」

「真つ二つになるとこだったぜ」

「こんなのが徘徊してるんですね…。恐ろしい城跡…。リリアと二人で大丈夫かなあ…」

なんだかんだ言いながら余裕の三人に比べて、ミューはもうほぼ余裕は無い状態である。アイシがパーティ全員を回復した後に奥へと向かう。広めの空間にちよつとした台があり、そこに婦人の幽霊がいた。また頼みごとをされるかと構えながら話しかけると、犬の代わりに虫退治をしてくれたら水晶をやるうと言われた。何だか無茶な要求を…と思いつつ、隣の部屋を覗いてみると、確かに退治しないといけない程の大量の甲虫がいた。

「何だか見るだけで気分悪くなる部屋ですね…」

「ほぼ無限に湧いてくる気がするけど、ある程度狩って虫の足でも持って行けば納得するでしょー」

「お掃除行きますかー」と

「結構攻撃きついで危なくなったら下がって下さいねです」

一行が部屋に足を踏み入れた瞬間甲虫がザワザワと奥から向かって来た。大量の虫が一斉に押し寄せて来る様は非常に気持ちが悪い。エルサが斧で薙ぎ払い、ミューも槍を振り回して一掃する。攻撃を

掻い潜った甲虫の噛み付きが強力で、細かく傷を負う度にアイシが素早く癒しの魔法を唱える。あらかた片付き、新手が来ないうちに撤収することにした。部屋の入口付近の虫の脚を集めて先程の幽霊に見せると、汚い物を見る様に目を覆い、水晶を渡してくれた。人に物を頼んだのにこの態度と、若干苛立ちながらもありがたく水晶を頂戴するミュー。

「さてとー、そろそろ帰りますかー」

「可愛い娘達との楽しい時間ももうお別れか…何という儂さ…」

「カリッド…そろそろ黙ろうかー」

「おおっと、エルサ様その斧は何でございましょうか。私めに何か不徳の致すところなど…」

「カリッド…正義の鉄槌欲しくなかったら黙ってね」

「ハイ」

婦人の幽霊の前で何をやっているんだろうと思いつつ見えていたミュー。街に帰ろうと元来た道に戻ろうとするのをアイシに止められる。

「ミューさん、こっちがいいですよ？」

「え？来たほうからじゃないの？」

「いいから来てみて下さい。近道ですよ」

半信半疑で先程の虫のいる場所を走り抜け、奥へと進む。瓦礫で真ん中が塞がれている部屋に、守護者の像と隣に転送用の装置が用意されていた。

「これで、入口付近まで一気に帰れるんですよ」

「へえー便利！」

そうしてミューとアイシの二人が話している最中だった。部屋の横道から突然巨大な斧を持った大きな人型の魔物が飛び込んできた。急いで槍を構えるも、走り込んで来た勢いそのままに、大きな左手でわし掴まれて意識が遠のく。そして魔物は持っていた斧を大きく振りかぶって、身動きの取れないミューへ断罪の一撃を加えた。たった一回の攻撃で視界が赤く染まり、呼吸が苦しくなる。さらにもう一撃加えようと斧を振りかぶったその断罪者の攻撃に死を覚悟したミューだったが、横合いから火球が飛んできて攻撃を逸らす。ようやく身体が動く様になったミューにアイシが叫ぶ。

「ミューさん！処刑者です！左手に触られると危険です！早くワープを！」

すっと、ミューとアイシの間に割って入ったカリッドは髪をかき上げると、杖を処刑者に向けながら宣言した。

「へい！処刑者さん…可愛い女の子を俺の前で泣かすなんて…やってくれるじゃない…。本気出しちゃうぜ。エルサ！」

「はいはい、いっくよ〜！」

気合いの声と共に、エルサが斧を振りかぶって走り込む。カリッドが特大の火球を放ち処刑者の被っている袋状の物を燃やす。動きの覚束ないミューへ癒しの魔法をかけた後に、防御の魔法を使って全員を守護するアイシ。未だに身体がまともに動かないミューが見たのは、防御の魔法で光り輝きながら処刑者へ見事な連携で攻撃を加えて行く三人の姿だった。

「ミューさん危ないので先にそこから入口へ！」

「はい…」

見事な連携に自分の出来る事は無いと、素直にそのアイシの言葉に従い転送装置に触れる。あれほどオドオドしていたはずのアイシも、凜とした佇まいで、パーティーの傷の具合を見つつ、的確に癒しの魔法や防御の魔法を掛け直す。カリッドが魔法の詠唱をする際は、エルサが大上段に斧を振り下ろして埋める。その一連の流れを横目に棒状の装置に触れたミューは気付けば入口の吹き抜けのある場所へと飛ばされていた。

「これが完成したパーティーなんだね…」

抜いたままだった槍を握りしめ吹き抜けを見下ろしながら一人佇むミュー。ベテランパーティーの見事な連携に圧倒され、そして今の自分との差は何なのかを考える。基本リリアと二人旅。まだそこまで戦闘自体は苦しくはないけれど、この先にもっと強大な敵が現れた時、二人でどうにか出来るのか…。そして三人四人と増えて行った時に、自分はきちんと統率を取って戦っていいのか。不安はある。ただ同時に期待もある。彼女らの様に助け合いながら、お互い支え合いながら冒険を進めていくというのはとても素敵な事なのではないか…。そう決意し改めて槍を持つ手に力を籠めた時、他の三人が次々に転送されてきた。

「全く無視して帰ろうと思ったのにカリッドが本気出すからー。私も頑張っちゃったじゃんー」

「悪いなエルサ。でも俺らなら楽勝だったろ？」

「まあいいけどねー。さあ帰るよーん」

エルサ、カリッド、ミュー、アイシの順に街への帰還装置へと小走りに戻って行く。小走りしながらアイシに話しかけるミュー。

「ねえアイシさんは、どうやってこのパーティに参加したの？」

「酒場でご飯選んでたらカリッドさんにナンパされて、それを殴ったエルサさんに改めてパーティ申請されました」

「……そうなんだ（うわああやりそう……）」

「そういえばもしかして何だけど、あの二人って……」

「どうなんですかね。でも明らかにエルサさんに対しては態度違うし、エルサさんがいさめるとカリッドさんも少しは治まりますしね」

「パーティ内でそういうのもあるんだ……」

「別にいいんじゃないですか？冒険者である前に男女だし。エロエロな所とか、軽い所とか、気障ったらしい所を抜かしたら結構いい感じですよカリッドさんも」

「結構抜かさなきゃなのね」

二人でこそそ喋っていて遅れがちなのを見とがめ、エルサが声をかける。

「アイシさんにミューちゃん遅ついよー。早く早くー」

「ホラ、うちの姫がお怒りだぜ。早く街戻ってゆっくりしようじゃねえか。まあ俺としては、そのままみんなで色々……仲良くしてもいいんだぜ？」

「カリッド……！いい加減にきなさい！」

「ちよつと待てエルサ！冗談だつて！斧を振り回すな！」

「じゃあ両手剣でー！」

「だから攻撃自体を止めるってー！」

「正義の鉄槌だよー！」

城の入口へと辿り着き、街への転送装置の付近の階段や、崩れかけた階段のそばをエルサに追いかけて回されて逃げ回るカリッド。楽しそうに見えるのはきつと気のせいではないだろう。パーティ内で、カイさんと私も：等と考え、またもや乙女な思考な自分に照れてしまい、顔を振って街への帰還装置に近付く。

「もー先帰っちゃいますよ〜」

「おーミューちゃん今日はありがとね！助かったよー」

「私何も出来てないですよー！」

「大丈夫ですよ戦士が増えるとそれだけ私も回復の方に気が回せるし。ありがとございました」

「そうそう、ミューちゃんいいレギンスだったよ〜。今度は是非、生でそのおみ足を拝見！だから！エルサ当たる！当たる！冗談だつて！」

「私はこのおバカちゃんに正義の鉄槌下したら帰るから、二人共帰っていいよー。ミューちゃんまた何かあったら呼ぶねー」

「ああ、はい。こんなんでも良ければ：またお願いします！」

「さ、ミューさん。邪魔物は早くいなくなりましたよーか」

「あーそうね。じゃあ、またねーです〜」

「おーい二人共助けてくれよー！おい！エルサ、今ローブ切れたつて！」

「大丈夫ー！私が直してあげるからー」

「いやお前不器用：おい髪の毛は狙うなつて！！」

いつまで経っても終わらない痴話喧嘩を見ながら、アイシと二人で街への転送装置を触って帰還する。ベテランパーティに参加するというのは非常に気疲れが多かったが、色々と学ぶ物も多かったと、改めて身体を休ませる為に宿屋へと向かうミューであった。

名犬の城跡で（後書き）

エルサさん デイジーさん アイシさん カイさん。それぞれの操作する別キャラクターでもあります。カリッドさんはもっとえろしゅでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4182y/>

冒険者かく語りき

2011年12月11日05時49分発行